

# アメリカ農村社会学史研究序説

森 岡 清 美

## 目 次

I	農村社会学史の対象と方法	1
II	草創期のアメリカ農村社会学	10
1.	開拓期 (1894~1912)	10
2.	成立期 (1913~1924)	22
3.	反省期 (1925~1928)	45
	注	69
	引用文献	74
	あとがき	79

## I 農村社会学史の対象と方法

### 1. 名称の問題

農村社会学にかんする最初の体系的なテキストを著述したジレット

(John Morris Gillette, 1866~1949) は、後年書き改めたテキストの中で、農村社会学 rural sociology という名称に言及してつぎのように述べている。

社会学は一つであり、社会学の一般科学のほかに農村的社会学などというものはありえないから、この名称は誤用ではないかとも考えられる。ことの起こりは、高等教育機関における教員や文筆家が、農村事情研究への社会学的アプローチを指すためにこの標題を採用したことである。彼らには適切な記述的表現に見えたのであろう。スペンサーによれば、名辭の起源はとりわけ記述的であるとのことだから、農村社会学という名称は農村社会の研究がまだその緒に付いたばかりであることを示している。したがって、やがてこの学問が成熟すれば、ルーラル・ソシオロジィほどには記述的でなく、形が一層整った標題が採用されるかもしれない。だが名称にかんする慣例によれば、例えば心理学には、一般心理学の外に比較心理学・異常心理学・経験心理学・生理心理学などあるのだから、農村社会学という名称は必ずしも誤りではない。(1922: 14~15)

ジレットがよりふさわしい名称の出現を将来に待望して以来、すでに60余年を経過し、斯学は当時の「問題段階」を脱して科学的農村社会学の確立をみた。にもかかわらず、1917年段階にはまだ一般的承認さええていなかったルーラル・ソシオロジィなる名称 (Lively 1927: 231) が、いまでもそのまま踏襲されている。教科書や研究論文・講座の題目はいうまでもなく、農村社会学者、農村社会学会 Rural Sociological Society (1938年創立) およびその機関誌 *Rural Sociology* (1936年創

刊)など使用されるほどに、この名称は熟して何人も怪しまない。そもそも発端においては、ルーラル・ソシオロジイとは舌足らずな記述的表現であり、学術語としては不正確を免れなかったであろうが、今日ではむしろ、正確であるが冗長な表現の約語と見なされているものようである。

ホーソー (Hawthorne 1926) は早くも従来の名称を斥けて、*The Sociology of Rural Life* と題する教科書を著わしたのも、ルーラル・ソシオロジイという名称のあいまいさを避けたかったためであらう。<sup>(1)</sup> サンダーソン (Sanderson 1927:81) もこの意見に追随している。カルプとブランナー (Kolb and Brunner 1935) はルーラル・ソシオロジイにかえて *A Study of Rural Society* という名称を使った。ルーラル・ソシオロジイとは農村的社会学ではなくて、「農村生活の社会学」ないし「農村社会の研究」を意味する慣用語として理解されなければなら<sup>(2)</sup>ない。

## 2. 対象

農村社会学はドイツのヴィーゼ (Leopold von Wiese, 1876~1969) を中心として大陸においてもやや見るべきものがあるが、そもそも斯学を生み落したものはアメリカの農村社会問題であり (Sims 1928:10), 学としての成立を遂げ、学史的に組織的な反省に価するほどの発展を示したのも、<sup>(3)</sup> 海外ではひとりアメリカ農村社会学を挙げうるのみである。もちろん、ソーキンら (Sorokin et al.) の大著 *A Systematic Source Book in Rural Sociology* (1930~32) が世に出て以来、斯学はアメリカ

の国境を越えて広く比較社会学としての体裁を具備することになる。したがって、アメリカ農村社会学とは American rural sociology ではなくて rural sociology in the United States と諒解されなければならぬ。われわれはアメリカの土壤に芽生え、アメリカの社会的現実と隣接諸科学から栄養と刺激を受けて成長し、鬱然たる一偉観を呈するに至った農村社会学を分析の対象とする。しかし、これを科学方法論といった立場からの原理的考察に委ねるものではない。けだし、われわれの意図は、農村社会学がいかにして成立したかを問うて、斯学の理論的構築を試みるところにはないからである。むしろ、農村社会学と命名された一個の科学の存在を前提し、その発端から確立に至る歴史的展開の追跡を志している。一言でいえば、斯学の横断的体系的討究ではなくて、縦断的歴史的考察がわれわれの直接の関心なのである。

### 3. 方法

上に述べたように、本稿は斯学の原理的考察ではなく、学史的検討である。しかし学史的吟味は、決して人名簿的・沿革史的ないし年代記的回顧を意味しない。事実の時間的配列そのものは歴史の素材たりえても、未だ真に歴史学の名に値しないからである。学としての歴史にとって不可欠な操作は、歴史的因果関係の定立であり、諸事実を因果的に帰属させることである。だが、事実を構成する諸要因は単純でなく、諸要因間の関係また甚だ複雑であるから、諸事実間の因果関係は網の目ののごとくに錯綜している。したがって、因果関係は自明なものとして与えられているのではない。数多くの因果の可能性のなかか

ら、ある特定の因果関係を選択的に発見する操作を必要とする。このためには一定の立場を確立し、これを堅持することが要請される。すなわち、方法の自覚的駆使を欠くことができないのである。このような立場や方法は、斯学の原理的考察によって与えられる。学史的吟味と原理的考察は、かように相携えて学問論の建設に貢献するものである。社会学史は、研究者の原論的理解に立脚し、この理解に基づいた一定の基準によって、いわば批判的に反省する作業であり、やがて積極的な農村社会学の理論的構築を志向するものである、といって過言ではない（新明 1951：7）。

われわれはここで、一般に史的考察に必要な、または社会学史的考察にとって重要な方法を論ずることを任としない。ただ、とくに農村社会学史にとって、あるいはアメリカ農村社会学史にとって不可欠と考えられる諸点を指摘しておきたい。

(1) 社会学の一部としての農村社会学：

社会学を二つに分けて、原理的考察に捧げる部分を理論社会学とし、この原理の実際場面への応用に任ずるものを応用社会学とする学者においては、農村社会学は応用社会学であった（Vogt 1917:15, Gillette 1922: 7-8, Gee 1929: 838）。また、一般的原理の応用といった単なる技術論ではなく、特殊の対象をもち、特殊の領域を通して、一般社会学の学的発展に貢献する科学的使命を負うものと考えるときは、農村社会学は特殊社会学であろう（Sorokin and Zimmerman 1929: 8, Nelson 1948: 2）。さらに、農村社会学・都市社会学・家族社会学・宗教社会学などの特殊的専門分野における学的成果を除いて、この外に一般的な社会

学は考えないとする立場によれば、農村社会学は社会学の一局面とよばれる (Lively 1927: 233)。しかし、応用的技術論であれ、特殊的分肢学であれ、また社会学そのものの一面であれ、農村社会学は社会学の一部分であるという見方は、一貫して共有された基礎的観念であると考えられる。

このことは、農村社会学の史的展開を反省するさいに、社会学一般の動向、学問的性質の推移、主要問題の変遷を無視してはならないことを意味する。斯学が一たび科学として成立した後は、学としての自律的發展が顕著になることであろうし、また草創期においても、斯学の成長をその枠内に限って跡づけることは、不可能でないのみならず、諸科学の間に対等の一議席を獲得するための積極的意義さえもつかもしれない。しかし、視野をさように限ることは、学史としては致命的な欠陥をもつ。この点において、ホッファー (Hoffer 1926)、カイゼンブレヒト (Kaysenbrecht 1932)、ランディス (Landis 1938) 等の論考は、社会学にたいする読者の広い知識を前提しうるのでなければ、不十分のそしりを免れ難い。しかも、ここでいう農村社会学史はアメリカ農村社会学史であるから、アメリカ社会学にたいする理解が一般的に深くない諸国においては、とりわけこの点が顧慮されなければならない。例えば、わが国のアメリカ農村社会学紹介者が、殆ど例外なしにこの顧慮を欠いていることは (鈴木 1933)、彼らのすぐれた開拓者の業績の故に、惜みても余りあることといわなければならぬ。社会学一般との連絡を絶たれた農村社会学は、文学者の口吻をかりて表現すれば、名も知れぬ大海に漂う棚なし小舟である。かような形の学史的反省は、

ナンセンスでないにしても、みのり多いものとはいふことができぬ。われわれはたとえ棚なし小舟であるにせよ、社会学全般の港と通信を絶ってはならない。このような配慮は、農村社会学という扁舟が出帆しようとする斯学創成期において、とくに重要である (Lively 1928: 258)。

(2) 農村生活の社会学としての農村社会学：

農村社会学が社会学の中で一つの位置を占めるゆえんは、社会学の他の専門分野では代置しえぬ対象領域をもつからである。それは、農業者の地域社会 (Taylor 1926, Sims 1928: 4), あるいは農村生活 (Sanderson 1942) とよばれるものである。したがって、農村生活における変化が農村社会学に刺戟を与え内容を豊富にする。とくにアメリカでは、この1世紀近い間における農業技術の顕著な進歩と都市化の急速な進展とが、農業経営にもまた農村民の態度にも強い影響を及ぼしたから、アメリカ農村の変動にたいする理解なしに、農村社会学を語ることはできない。事実、農村事情が社会的政治的問題となったときに、斯学はとりわけ大きなチャレンジをうけた。その意味で、農村生活に関する法令の制定や施設の建設が、農村社会学の成長にいかなる効果を及ぼしたかを考察することは、きわめて重要である。

つぎに、農村社会学は、農業あるいは農村を対象とする他の社会科学の方法や成果に無智であってはならない。すなわち、社会学全般の発展のほかに、農村生活を共通の対象とする隣接諸科学の進歩を考慮に入れる必要がある。たとえば、初期の農村社会学は農業経済学から大きな示唆をうけ、ある意味ではその対立科学として形成が急がれた

ともいうことができる (Mann 1917, Hawthorne 1926: 8)。また、文化人類学の長足の進歩に伴って文明社会もその研究対象となり、小都市が人類学的手法によって研究されるようになったが、社会構成が比較的単純であり、未開社会の研究成果や方法を援用しうる可能性の多い農村にたいする人類学的手法による研究は、豊かな収穫を約束されている。今世紀半ばの農村社会学における人類学的成果の吸収はその一つの例証であろう (Loomis and Beegle 1950, Taylor 1945, 1949)。

### (3) 日本農村社会学への貢献：

農村社会学史は、客観的学史として考察することを要求する客体的条件をもっている。農村社会学の展開を研究間の相互影響ないし影響被影響の関係において理解するのみならず、これを広く社会学一般、および農村生活を対象とする隣接諸科学の成果、さらに農村社会問題の展開との関連において考察することが要請される。しかし、かかる分析を全面的に遂行しえないときには、研究者の関心によって何ほどかの制約をうけるという主体的条件も避けがたいものであろう。われわれの重要関心は、アメリカ農村社会学の反省を通して、日本農村社会学の普遍性と特殊性を併せて明らかにするとともに、新しい問題や方法を学ぶことによって、斯学の内容を充実しようとするにある。日本農村社会学の特筆すべき関心は、家族と村落の問題であり (鈴木 1940: 33)、それは实际的要請と深く結びついている。アメリカ農村社会学の主要な焦点の少なくとも若干はこれらの問題に志向されるのであるが (Gray 1947)、いかなるアプローチによっていかなる成果を挙げているか、農村社会学の諸問題を取り扱う本稿続篇において、とく



に綿密な討究を施したいと思う。

(4) 時代区分の問題：

すでに述べたように、本稿は農村社会学の批判的考察を通じてこれを歴史的に体系化することを企図するものである。歴史的体系化のためには、一定の基準に従って資料を取捨選択し、農村社会学の展開にたいして意味ありとされるか、ないし研究者にとって価値ありとして選ばれた資料を、一定の歴史の枠にはめこむ操作が必要である。歴史の枠に定位することは、発生的順序による整頓のように客観的に疑う余地のないものとして与えられてはいない。同一時代に起こった二つの事件は、相接続する歴史的範疇の中へ別々に投入されることもあり、同一事件も見方によっては異なる時代に帰属させられることも少なくないのである。したがって、歴史の枠にはめこむとは、一定の歴史の枠組を用意し、これを基準として資料を整序することに外ならない。こうした歴史の枠とはさきにふれた学史の方法にも関連するのであるが、ここではとくに時代区分の問題として考察したい。

われわれは農村社会学を農村社会にかんする社会学的研究と解し、よりよい農村社会の建設を意図する実学的傾向のものを極力排除しようとする。社会改良にたいする情熱や、農村にたいする共感、研究者を根底的に動かす原動力であることを率直に認めると同時に、その道は往々にして学問の自殺行であったことを併せて指摘しておきたい。農村社会現象、とくに農村集団を正常態においても異常態についても分析し、集団にかんする一般化と法則性、併せて農村集団の諸理論を発見する任務に自らを限定し、その成果を実地に適用して農村の向上

に資する努力は、これを他の人々に委ねる。これこそが、斯学を実用の奴婢たらしめず、斯学自身の成長と発展に貢献するものであり、かかる純理論的純学術的考究が、底の浅い実用的観察に勝って農村福祉に貢献しうるとわれわれは考える。されば、かかる意味において考えられた農村社会学が、いかにして成立し発展し来ったかは、本稿を一貫するテーマとなる。学史の時代区分もかかる根本的観念に基づいて決定されるべきである。われわれは、これを開拓期・成立期・反省期・発展期の4時代に分かつ。その理由と時代の上限・下限はそれぞれの個所において詳述されるであろう。なお本稿は、開拓期から反省期に至る草創期の分析で一まず筆を擱くことにしたい。

## II 草創期のアメリカ農村社会学

### 1. 開拓期 (1894~1912)

時代はヘンダーソン (C.R. Henderson) がシカゴ大学で初めて農村社会学を講じた1894年に<sup>(4)</sup>発端する。

「すべて科学あるいは体系的論策とみなされるものは、そもその発端において、その時代の大きな社会運動、ないし特定の知的活動と多かれ少なかれ何ほどの関係をもっていた。時代の要求と洞察の産物であった農村社会学もこの例にもれるものでない。」これは、すでに十有余年をへた農村社会学の成長を叙するにあたって、ジレット (Gillette 1922: 3) が冒頭を飾った一節である。彼によれば、農村社会

(10)

学は、農村問題にたいする政治家・教師・牧師・社会事業家その他識者の関心を父とし、その知的解明を志した一群の学者の努力を母として生み出された科学である。だとすれば、われわれはまず農村社会学の誕生を必要とした農村事情を考察し、ついで農村問題に関する知識の体系化を企図した学者の動向を理解しなければならぬ。

第1の点については、サイムズ (Sims 1928: 8-10) がウィルソン<sup>(5)</sup> (Wilson 1912) に依拠しつつ、農村社会学の誕生を農村事情の推移の中に把握する努力を示している。

第1期は開拓者の時代である。草分けの時代から東部では1800年頃まで、中西部の諸州では1835年以後まで、極西および南西部では90年代までを含む。この期間、とくに大ミシシッピー河谷では重要な運動はすべて土地に向けられていた。荒地や草原が開かれ、どこでもかしこでも農場がつくられたのである。極西部におけるこの時期の末期を除いて、農耕生活は自給自足的であった。それはまた手織物・手工業そして鋤耕作の時代であった。

土地耕作時代とよばれる第2期は、おおむね1800年頃、ニューイングランドと東部ではそれよりもやや早くから始まった。中西部では、ほぼ1835~40年頃に開拓者の時代と交替する。この時代はだいたい1890年頃までに終った。よく整った家庭・学校および教会がどこにも見られたから、この時代は農村社会の「古典時代」とも呼ばれる。漸く一陽来復して、開拓時代の粗末で辛勞の多い生活は昔語りになった。それは田舎住いの春であった。家族は大家族で、学校も教会も生気に溢れ、処女地は豊かな収穫をもたらした。達者で満

足しきった人々の間に健康な近隣生活が展開した。都市も繁栄の一途を辿り、田舎の青年の憧れの的となり始めて、東部ではすでに都市への移住が顕著であった。しかし、中西部では離村する人はまだごく少なかった。それにだいたい家族の移住ではなく、せいぜい個人的に出かける程度であった。だが、種々の変化が起こって、これまでほど好都合ではない新しい時代が準備されつつあった。水陸の交通運輸はめざましく進歩して、蒸汽船は海に疾駆し鉄道は帯のように大陸を巡った。こうした運輸の革命は農場生産物を世界の市場にひき出したのである。ちょうどその頃、開拓者は西部の端々にまで行きついて、何人も占有しうる自由な土地が急速に底をつき始めた。他方、都市工業は膨張して労働力を吸引しつつあった。田舎町の商店は都市の大商店に圧倒されるなど、産業革命の圧力がひしひしと感じられていた。折しも機械が農耕に導入され始めた。こうして農業過程は鋤農耕、すなわち機械以前の状態から機械農耕に変容し、農業革命が起こりつつあった。農夫の生産力は何倍も増大し、それだけ労働の需要は少なくなった。かくして農村は第3の時代に移行しつつあったのである。

第3期は搾取者の時代であって、中西部では1890年頃始まり、1920年までに全国に広がった。土地の高騰と投機がこの時代の特色であった。もはや自由に手に入れうる土地がなくなると、地価は騰貴し始めた。町の人も農夫も、農業を営むためでなくただ金もうけのために売ったり買ったりしたので、地価は2倍3倍になり、4倍になった。商業的農業が自給農業に代わった。地代の高騰とともに

小作制度がひどくなり、不在地主は今や普通のこととなったのである。農村を捨てて都市へ出るものが陸続として踵を接した。それとともに農夫の動揺が至る所に現れた。地代の高いところから低い地方へと、小作人があちこち移り歩いたことがよくこれを示している。学校も教会も衰退した。新しい田舎地方では農場を放棄するものが現れた。この時代は農業社会の衰運の時代である。農村社会学はまさにこの時代に起こった。あたかも都市生活が後から後から多くの問題を生んだときに一般社会学の出現をみたように、田舎生活が甚だ順応を欠いた時代に、農村社会学が生まれたのである。<sup>(6)</sup>

農村社会の没落が農村社会学をよび起こしたという見解は、概括論としては正鵠を得ているにしても、未だ説得力を欠く憾みなしとしない。農村社会の衰退が農村社会学の誕生を必要としたということは、一体何であるか。換言すれば、農村社会の衰退がいかなる意味に把握されたればこそ、農村社会学の勃興をまたねばならなかったのであるか。われわれはいま暫くサイムズ (Sims 1928: 10-11) の所説に耳を傾けなければならない。

農村社会学という新しい社会学がなぜ勃興したかを理解するためには、このように衰運を辿る農村社会の諸問題を明瞭に把握することが必要である。変動と動揺は今に始まったことではなく、殆どアメリカの田舎生活につきものですらあった。開拓者の時代に先立って幾度も農業問題が発生した。南北戦争以前に、公用地をわがものにしようとする煽動と政争があり、南北戦争後 1870~80 年代に、農業不況・鉄道税・金融・物価・農場抵当の諸問題や、グレインジ

チャー運動を起こすに至った諸問題があった。経済的条件は危機をはらみ、解決する後から続々と問題が起こった。グレンジと農民連盟の広汎な組織は農民の苦境を国民に知らしめた。けれどもこれらの諸問題は、農村社会についてのいかなる科学をも直接に導出するものではなかった。なぜなら、これらは主に経済的な問題であったからである。重要な問題には違いないが、その社会学的結末は必ずしも農村社会の秩序を破壊するものではなかった。

1880年代後半には、農村諸問題は経済問題以上のものとなり、90年代にはこの傾向に拍車がかけられた。家族生活・諸制度・住民の素質および地域社会などの問題が現れ始めたのである。経済的諸条件が住民を土地から駆逐しない限りは、学校や教会などの制度生活と地域社会生活は、あまりひどく攪乱されることはない。誰も事態の危機を感知しなかった。しかし、農民が農場を捨てて都市へ走り、学校と教会が閉鎖され、田舎に残る人々も住むに好ましくない所だと考えるようになると、事態は根本的な危機に入っている。最も重要な社会問題が提起され始め、誰がみても容易ならぬことになった。

単なる農村問題は必ずしも農村社会学を喚起しない。サイムズが指摘したように、初期の農村問題は農業問題として農業経済学によって対処されたからである。しかしながら、農村問題が、「農業経済学という若い科学に位座をもたぬ」(Ross 1926) 農村生活問題として把握されたときに、すなわち、農村問題がまさに、経済問題よりも広く深くかつ複雑な生活問題・社会問題として自覚されたときに、農村社会学の出現をまたなければならない。農村問題が経済問題・経営問題か

ら、生活問題・社会問題の深みに沈下したアメリカこそ、農村社会学を生み出すまでに熟した土壌だったのである。<sup>(7)</sup>この意味で農村社会学は「アメリカが創り出したもの」(Sims 1928: 10)である。

さて、農村問題を農村社会問題と理解することは、農村社会学の誕生にとって一つの必須要件であった。ジレット (Gillette 1922: 23-25, 1913: 7) は、農村問題は本質的に社会問題であるとして、おおむねつぎのように述べている。

土地を改良するのは金をもうけるためであり、金をもうけるのはより充実したよりよい生活をするためである。したがって、いかにして農村生活を真に満足なものにするかという問題こそが、重要なまた中心的な農村問題であって、土地改良・収穫の増加・市場・小作・道路・農場組織・学校・教会等の問題も、結局ここに帰一する。例えば、農民離村は農村生活の不満足、いわば社会的飢餓を如実に物語っている。このように、あらゆる農村問題は社会的様相を有するものであり、大きな農村問題すなわち農業過程と田舎生活の社会化の問題として観察されなければならぬ。

農村問題を農村社会問題として把握することは、より端的に表現するならばその人間的側面を重視することである。「社会学は田舎生活の人間的側面を重視する」と前おきして、ホーソー (Hawthorne 1926: 4) はつぎのように述べている。

古い農業科学は、人間よりも土地・貨幣・家屋・土壌あるいは植物に注意を向けたから、農夫は幸福を求めて努力している個人としてよりも、機械の歯車、商品の生産者としてみられてきた。しかる

に社会学は、人間の正しい位置を万物の中心に回復して、あらゆる経済的・技術的発達の目的はよりよい生活であることに注目する。それは農場における人間問題を重視し、人間の価値を保持しより大きな幸福の源をつくるために、社会を科学的に組織する必要を強調する。

這般の事情をさらに的確に指摘したものは、ホッファー、カルプとブランナー (Kolb and Brunner 1940: 2-3) およびカイゼンブレヒト (Kaysenbrecht 1932: 38) などである。ホッファー (Hoffer 1926: 95) は、農村社会学の発達を論じた文章のなかでつぎのように書いている。

生産と分配の問題を含めて市場問題が現れ、余剰の土地が払底し地力が疲弊したこと、向都移住が激化して最良の指導者が農場を去ったこと、町と田舎の生活条件の対照が日ましに著しくなったことなどが注目され、単により多くの貨幣を獲得することが決して農民の社会問題を解決するものでないことがいよいよ明らかになった。農村の福祉を促進するために、農科大学や農業試験場がたてられ、農民により多くの収穫を挙げる方法を指導した。しかし、このようにして農民がえた動植物の生産に関する科学的知識が、一面ではかえって農場を離れて都市に向う時期を早めさせることにならなかったわけでない。一言でいえば、農業振興策はすべて人間的要素を度外視してはならぬことが明らかになったのである。

一六  
一  
このように、農村問題を社会問題として理解することは、実は農村の、さらに簡明に言えば、農業の人間的要素・人間的側面に注意を向けることに外ならぬ<sup>(8)</sup>。究極の目標は、よりよい真に満足な暮らしを



たてることであり、これは経済面のみの改善によっては必ずしも全面的な解決を与えられない問題であるという意味で、社会的な対処策を必要とする。それは結局、農業経営のかげにおおわれていた田舎生活の全面を回復し、よりよい生活を営むためには人間的要素がいかに重要であるかを再発見することである。人間的要素の重視とは、かくて、田舎生活を構成する人間関係、社会関係の正当な評価であらねばならぬ。人間関係の科学的研究を以て任ずる社会学を除いて、かかる問題に根本的な助言をなしうる科学がほかにあるはずはない。ここにおいて、農村生活の社会学が時代の要望を担って登場する大道が開かれた。農村社会学はまさに誕生して、他の農村諸科学のかつて達成しえなかった課題を成就しなければならぬ。

われわれは、農村社会学の誕生を報ずる前に、第2点、すなわち斯<sup>(9)</sup>学を生み出した「知的活動」の状況を顧みなければならない。

農村社会学が農村社会問題の対処策を講ずる学として発足するためには、社会科学ないし社会学自体が社会改善に貢献しうる学問として観念されている必要がある。それは単に社会学が実用的であるということだけでなく、積極的に社会の再組織に決定的な知的役割を演じうるという意味においてである。農村問題への関心は、人間の福祉を制御する手段としての社会科学の有用性の認識に立脚する、と考えたヴォグトの所論 (Vogt 1917: vii, なお Gillette 1922: 18-19) を、ここに若干紹介すればつぎのとおりである。

環境に関する知識が進歩すると、人間の関心に従って環境を制御する可能性が生ずる。その適例は自然科学にみられる。人間関係の

知識も科学的な社会的順応と調整のために有効である。……個人の行為に能率の原理があり、一定の集団の能率はよく規定された原理の作用に負うことはすでに周知の事実である。集団全体の生活の能率を高め、一方では社会的エネルギーの損耗を最小限にし、他方、最大限の共同福祉を確保するために社会科学者は熱心に努力しつづける。……人間は生存条件を学び、これらを有利なように調整する能力をもっている。この能力にたいする信仰が、どの社会科学の研究にとっても、何よりも欠くことのできぬ第1の前提である。

そこには、科学の実用的価値にたいする信頼、いな、そのような科学を創出し、駆使して生活を統御する人間の能力にたいする不動の信仰が告白されている。ヴォグトは、来るとも来ぬとも分らぬ死後の天国に望みを託するよりは、この現世を天国にしようではないかと呼びかけるのである。われわれは遠く、コント (Comte 1822) の「社会の再組織に必要な科学的作業案」を想起する。社会の再組織にとって基本的に必要な手順は、政治学から神学のおよび形而上学的性質を完全に払拭して、これを観察科学の域にまで高めることである。社会にたいする実証的な知識こそが新たな社会組織を可能ならしめる。コントの前半生を貫いた知識にたいする信仰に、ヴォグトの行文は高らかに共鳴してはいないか。当時の社会学者たち、例えばロス (Ross 1920: Preface) が、「社会学者は科学の方法に従うが、しかし知識をそれ自身のために求めることで満足しない。彼らは人間関係を改善する目的を公言して憚らないのである」というとき、同じように、知識の現実的威力を讃美するものと見ることができる。社会学は人間関係を調整して、よ

りよい社会生活を実現させるために役立つという当代の科学観が、農村問題の科学的解決に関心を寄せたのは当然のなりゆきであつた。たとえ農村問題が社会生活問題として把握されたにしても、社会科学に現実を統御する自信が欠如していたならば、農村社会学的研究は出現すべくもなかったであろう。ここにおいて、農村社会学が誕生する客体的条件も主体的条件も、二つながら充足された。時はいよいよ熟したのである。

われわれの農村社会学は次第にその輪郭を明らかにしてくるのであるが、まず先駆的運動を一べつしておかなければならない。われわれは再びサイムズの説明 (Sims 1928: 11-13) を迎えることにしよう。

ニューイングランドおよびニューヨーク州では、こうした諸条件(森岡註一農村社会問題)に注意を向けるものが、雑誌記者や社会指導者の間に少しずつ出てきた。彼らは農場の放棄、町の衰退、農業の不振、人口の枯渇および社会的墮落を指摘し、その主な原因は都市および西部への人口移動であると考えた。そこで「青年を農場に引きとめよ」と叫び、「農場へ帰ろう」の運動を起こした。中西部では農場雑誌の編集者やグレンジの指導者の中にこうした社会の動きを感知する者が現れてきた。田舎に生起しつつある事態を知的に諒解し、これについて論説を発表した人々にまじって、とくに注目すべきはニューヨーク農科大学学長ベイリー (L.H. Bailey) とマサチューセッツ農科大学学長バターフィールド (K.L. Butterfield) である。田舎生活の社会学にたいする一般的関心を喚起し、科学研究を推進した開拓者的業績の多くは、この2人に負うのである。基本的に

経済的ではない表現で農村社会問題を初めて明瞭に叙述したのは、  
ベイリー学長その人であった。問題とは実に、「最良のアメリカ的  
理想と調和する文明を、農場に展開し維持する問題」であると断言  
したとき、彼は直截に人間的でかつ社会的なものを強調したのであ  
る。

1910年までは、農村社会学について何ほども知られていなかった。  
農村生活の諸相に関する相当な定期刊行物、2、3のモノグラフや  
学術論文が現れたが、断片的未組織的であって、いやしくも科学の  
名に価するか、科学の成立を望見させうるような知識体系をなして  
いなかった。ミシガン大学で農村社会学のコースが創設され、恐ら  
く他の2、3の高等教育機関においてこのコースが置かれただろう  
が、農科大学でも私立大学でもこの分野にたいする切実な認識が欠  
けていた。<sup>(11)</sup>

時に、農村社会学に関する一般的な関心を初めて刺戟した特筆す  
べき事件が起こった。それは、大統領ルーズベルトが田舎生活委員  
会 Commission on Country Life を創設し、ベイリー、バターフィ  
ールドら7名の委員を指名して、農村問題の調査に当たらせたこと  
である。委員会は1907年に設置をみた。この企画は大統領自らが買  
って出た保守運動の一翼を担うものとみなされた。1911年に公刊さ  
れた本委員会の公的報告の序文において、委員会の目的が残りにく  
開陳されている。曰く「本委員会が指名されたゆえんは、農場生活  
問題をまともに考察することが、田舎の福祉にとってきわめて重要  
な時機に到達したからに外ならない。農場生活問題はこれまで殆ん

ど考慮に入れられなかったために、田舎に住む者にも、ひいては全国民にも思わしくない事態となった」と。

委員長はいみじくもベイリー学長であり、全国各地の代表が委員の席に連なった。彼らは自ら調査し、また州から州へと公聴会を開いて人々の意見に耳を傾けた。大統領の手もとに最終的に提出された報告書は、農村社会学の進歩に大きな刺戟を与えた。<sup>(12)</sup> 事実、この報告が来るべきものを予告したといっても、大きな誤りではない。

報告書には田舎生活の重要な欠陥としてつぎの8項が確認され力説されてあった。すなわち、

1. 不注意な農耕によって惹起された土壌の欠損、
2. 熟練農場労働の供給不充分、
3. 土地にたいする投機、
4. 市場過程と農村子弟の教育を阻んでいる貧弱な道路、
5. 農村を鉄道と中間者の収奪に委ねている市場条件、
6. 農村家族における保健上の欠陥、
7. 多くの人が田舎を捨てて都市へ移住する原因となる農村婦人の過重労働、
8. 農村学校の不備。

これらの諸点は明らかに人間的側面以外の諸相をも含んでいるが、すべて農民生活に関係のあるものばかりである。この報告が一たび世に出て以来、農村社会学は急速に進歩した。キリスト教会の伝道部や大学などの諸機関、および私人もこの方面に関心をもって、所方々で実地調査が行なわれ、農村社会学のコースが大学の教授科

目の中に編みこまれたのである。

このようにして農村社会学が漸次形成されていった。しかしまだ誕生の前夜であり、学史以前ともいべき段階であろう。われわれは、この方面の最初の体系的著述が公刊されるまで、新しい学問が暁の星に伴われて到来するのを待たなければならぬ。

## 2. 成立期 (1913~1924)

1913年、農村社会学の成立を告げる暁の鐘が殷々とうち鳴らされた。それはジレットの著作にかかる *Constructive Rural Sociology* の出版である。農村社会学建設の意欲をタイトルに反映させたこの本によって、彼は「アメリカ農村社会学の父」という光栄ある称号をえた (Reinhardt 1950b)。後年著者自身がこの書物を評して、この方面での開拓者的作業であったともらした通り、本書の出現が斯学の発達と大学における農村社会学教育の普及に及ぼした影響は甚大であった。われわれはまずジレットの学論を顧み、それと前後して刊行されたヴォグトの著述を併せ紹介して、成立期の特色を検討してみたいと思う。

### (1) ジレットの農村社会学説

斯学にたいするジレットの貢献は、主としてつぎの2著の中から汲み上げることができる。<sup>(13)</sup>

1. *Constructive Rural Sociology*, 1913, 1915.

2. *Rural Sociology*, 1922, 1928.

第1の書物において著者は、「農村社会学の範囲を規定し、農村と

(22)

都市の差を考察し、合衆国における農村地域社会の諸類型を区別し、かような区別を生んだ自然的社会的要素を指摘し、村から都市への人口移動とその諸要因の性質を考究し、農村と都市の利点を比較し、農村問題の性質を画き出し、農業・農産物販売・農場労働および農場家庭の改善についてはこれらが農村福祉と関連のある限り考察し、社会制度の目録をつくり、いかにすればこれらが改良されるかを示そうとする」(1913: vii)。かつてアメリカ最初の社会学教科書を師スモール (Albion W. Small, 1854~1926) を佐けて執筆したミネソタ大学総長ヴィンセント (G.E. Vincent) の序文に明記されているように、一言でいうならば、「本書の目的は、過去の発展と今日の傾向と、および将来の成長に関する判断の基礎となる基本的事実を明瞭に示すことである。」(1913: vi)

著者は第1章を割いて、農村社会学の意味と重要性の説明に充てている。学論としては幼稚の域を出ないが、大要を紹介すればつぎの通りである。

農村社会学の独特な任務は、農村地域社会における生活の諸条件をもれなく挙示することである。すなわち、それは、生活諸条件の傾向と欠陥を発見し、特殊問題を描き出し、最良の社会生活の理想に従って改良の方途を示すものでなければならぬ。それゆえ、単なるジレッタント的研究ではない。所与の事態に照明を投げるために資料を組織するという意味で、有用であり实际的であろうとする。本書のような農村生活の研究は、問題が新しいだけに組織化が不充分であり、多くの局面が未開拓であるために絶対的な結論をもち出

すことはできないにしても、なおかつ、意見や確信を懐かせ、正しい政策と有効な行為への道を示すことであろう。(1913: 3)

著者にとって、農村社会学の任務は、社会改良という見地から農村地域社会の病態を解明し、進歩の処方箋を書くことである。事実を理解し事実の間に法則を定立するようなことは、重要な目的ではない。農村社会生活の向上改善を念頭に置かないいかなる研究も、好事家のなぐさみとして斥けられる。すべてが病態の理解と改善案の作製とい<sup>(14)</sup>う実用的実践的な目的に奉仕しなければ意味をなさない。人間社会とわれわれが呼ぶ大きな現象を説明するのが社会学の任務であるが、これを達成するためには、社会の起源と進化、進展あるいは停滞を生ぜしめた諸力や諸条件、組織の原理、進歩の原理、効果的な人間干涉の可能性、社会的統制と指導の機関を説明する必要があると考えた著者(Gillette 1916: 4)として、上述の見解はむしろ当然であろう。著者の学論は、社会学における農村社会学の位置を論じた文章によって一層明瞭になると思うが、この点について本書では一言半句も言及されていない。しからば農村関係の他の科学といかなる関係をもつか。

問題を全面的に考察し、農村生活全体へいかなほどの影響を及ぼすかを決定するために、問題の特殊相を討究することを任とする農村社会学は、まさにその故に、例えば、農村経済学のような他の農村研究と区別される。農村経済学は事業を最もよく進捗せしめて最大の富を致すために、農村の諸事を処理する最良の方法を発見しようとする。それは利害衝動を重視してこれを考察の中心に置く。「最大の富をもたらすものはこの道であるかあの道であるか」を問い、

(24)



その発見によって特定の道を推し進めるように説得する。例えば、農村の交通運輸の問題が経済学者の関心を惹くのは、それが農場の経済活動を遂行する上に必要であるからである。一方、農村社会学者にとってこの問題は、コミュニケーション・社会的接触の手段として、また生活の満足を高める手段として興味がある。このように対象はしばしば重複するけれども、各々が本来の目的を保持する限り衝突はありえない。同様のことは、政治学者と社会学者、歴史学者と社会学者、および他のあらゆる特殊社会学者と社会学者との関係にあてはまる。(1913: 3-4)

つまり、農村社会学は他の社会科学とたとえ同一の対象を取り扱うにしても、考察の視角が異なる。前者は全面的に検討しようとし、後者は特殊面に限ってこれを討究する。農村社会学が先行する他の諸科学に伍して自己の存在を主張しうるゆえんのものは、単なる対象の特殊性にあるのではなく、けだし他に類例を見ない視角の特異性に存するのであろう。新しい科学の成立を可能ならしめた斬新なアプローチは、この科学に独特の対象を与え、さまざまな特色を決定する。他の諸科学の換骨奪胎ならぬ農村社会学自身の有用性も、こうした視角の定め方によって約束されるのである。

農村社会学成立の理論的操作は、社会学一般から区別された農村社会学の自覚的形成と、農村諸社会科学に対置された農村社会学の意識的建設という、二重の作業を含んでいる。ジレットにおいては、農村社会学は「生活の諸条件をもれなく挙示し」「問題を全面的に考察する」点で、もろもろの農村諸研究と明確な一線を画する。つぎに社会

学一般との差異は、対象を「農村地域社会における生存の諸条件」に限定することによって、すでに自明であったのかもしれないが、農村社会学と一般社会学との関係は、第2の著書に至って初めて体系的に論述されるのである。ともあれ本書において、農村社会学はその対象と方法をほぼ確立しえたといえることができる。われわれが斯学の成立点をここに求めたのは、このゆえである。

一つの新しい科学の建設者は、斯学を理論的に基礎づけて諸学の間に対等の議席を獲得させる原論的作業に従事するのみならず、しばしば新しい学問の重要性を宣伝する啓蒙的作業にもたずさわらなければならない。ジレットもこの例にもれなかった。彼は農村社会学の範囲と意味を論じたのち、直ちに斯学の重要性の説明に転じ、予想外に大きな紙幅をこれがために割いている。彼の所論は凡そつぎのような趣旨のものである。

由来価値とは、人々の希求に対応して与えられる社会的産物であるから、今日、農村問題に非常な注意の向けられていることがすでに、農村社会学がいかに重要であることを示す最もよい証拠の一つである。少なくとも当面、大きな重要性をもっている。この外に2・3の付加的理由が挙げられる。すなわち、農業人口の全体人口にたいする比率は減少しつつあるにもかかわらず、全産業の基礎としての農業の低下しない重要性、および農村社会問題の重要性、農村社会学の農村住民にたいする有用性、国民全体にたいする重要性である。(1913: 4-8)

本書はつぎの諸章を含む。

1. 農村社会学の意味と重要性, 2. 農村社会と都市社会との相違, 3. 合衆国の自然的条件と農業, 4. 環境の分化的作用の結果としての地域社会の諸類型, 5. 農村の増加と都市の増加, 6. 農村問題の社会的性質, 7. 農場生活の得失, 8. 農場生活の改善, 9. 農耕の業務面の改善, 10. (承前), 11. 運輸通信の改善, 12. 合衆国における土地と労働の社会的諸相, 13. 農村の健康と衛生, 14. 農場生活をより魅力的にすること, 15. 田舎生活の社会化, 16. 農村社会制度とその改善, 17. (承前), 18. (承前), 19. 農村の慈善および矯正事業, 20. 農村社会調査。

*Constructive Rural Sociology* が公刊されて9年後、すなわち1922年、ジレットは農村社会学に関する第2の著作を世に問うた。序文において彼自らが、「前著の全面的な改訂」あるいは「全く新しい仕事」といっている *Rural Sociology* の出現である。前著にたいする反響が高まり、影響が広範囲に及ぶにつれて、その欠陥も次第に明らかになった。結局、これを全面的に改訂する必要に迫られて、農村の事態に関する新しい研究を重ね、この分野での全く新しいものを書こうとする9年間の研鑽が、本書に結実したのである。されば、われわれは彼の学問的成長を本書に期待することができる。以下、しばらく第2著に<sup>(15)</sup> 拠ってジレットの学論を窺うことにしたい (1922: 3-15)。

彼はまず農村社会学の発達を粗描する。斯学の誕生と発達を語る人としてジレットに若くものはない。思うに、彼もまた深い感慨をもってその発達を回顧したことであろう。ついで、農村社会学の目的と範囲を論ずるに及んで、彼の行文は俄かに緊張する。

もし、社会学が常に集団現象の厳密に科学的な究明を意味し；さらにさような企図が実利的動機に結びついてはならないのならば、「農村社会学」という名称は、農村社会の社会学的研究という科学的意義を表現するには充分でない。……もし農村生活を解決すべき一組の問題として取り扱うことが科学的でないならば、現在の農村社会学は科学として分類される資格をもたない。斯学は、合理的知性を農村地域の諸条件に適用しようという要求の昂揚によって勃興し来ったものであるから、その動機と精神は本来、实际的であり実利的であった。農村社会学の大きな任務は、農村社会生活の共感的理解を達成し、かつ、社会的努力の合理的原理をそれに適用することにある。今後もけだしそうであろう。……斯学の最も重きを置くところは、第1に、農村社会をその諸条件との関連において理解することであり、第2に、正しい活動の仕方について一定の様式を定めることである。われわれは農村社会学をつぎのように考える。それは農村社会を組織的に研究して、その諸条件と諸傾向を発見し、進歩の原理を組立てることを任務とする社会学の1分肢である、と。  
(1922: 6)

前著において述べられた斯学に関する観念と、今ここに示されたそれとの間に、果していくばくの逕庭を見出すことができるであろうか。表現の慎重さ、したがって一般社会学にたいする考慮の深化を除けば、所論の骨子は9年の歳月を貫いて同一である。すなわち、農村生活の共感的理解にもとづいて進歩の原理を編成し、活動の正しい方法を示すのが農村社会学の任務であるという根本的主張に、われわれは毫末

(28)

の変化をも見出しえない。たとえ科学性を犠牲にしても、ひたすら実践的実利の実用的であることが、彼においてはむしろ斯学のエトスというべきものであったろう。では、かかる実目的に奉仕すべき一個の社会学が、社会学一般にたいしていかなる関係に立つか。著者は、農村社会学がどのような意味で社会学の分枝とよばれるかという問題に、説明の筆を起こしている。

- (1) 何らか特殊なあるいは特別な部分が一般社会学から抽出され、新しい学問にまとめあげられたという意味で、農村社会学は一般社会学の派生科学である、とみなすことはできない。また、一般社会学が、農村社会学形成の素材になる諸事実や状況を提供したのでもなかった。ただ、つぎの意味においてである。すなわち、一般社会学で展開された社会の見方と一般社会原理が、一般社会学の訓練を受けた人々によって、農村社会学の組織化に適用されているということである。
- (2) しかし、そのことは、農村社会学が独立科学でないということにはならない。独自の科学的領域をもつという意味で独立している。一般社会学がその材料や内容のいく分かを農村社会学に依存するが、それでいて独立しているように、農村社会学は一般社会学から独立している。一般社会学が農村やその他の社会領域の研究からもたらされる新しい資料と内容を基礎として、自らを再建し再組織せねばならぬ限り、特殊社会科学に依存する。したがって、それは農村社会学が提供する知識を少なくとも前提している。
- (3) 農村社会学は応用科学である一方、一般社会学は理論科学である。

応用科学は一般科学よりも、原理と方法の適用に直接のかかわりをもっている。一般科学は広く一般化、合理的操作の原理、現象の法則、つまり実用上の技術および支配の基礎として諸作用要因を解明しようとし、それ自身技術および支配に大きな関係をもたない。他方、応用科学は一般的法則を具体的事態に適用することに重大な関心をもつ。しかし、単なる適用の技術あるいは支配に終始するものではなく、原理を展開し、処理の見地から事実を組織する。この意味で農村社会学は一般社会学に深い内的連関性を有する。ただ、原理の適用と改善案の作成に一般社会学よりも大きな注意を払うという重点の相違によって、農村社会学が応用科学とよばれるのである。(1922: 6-8)

農村社会学は、原理と方法の適用に直接のかかわりをもつ応用科学であるのにたいし、一般社会学はかかる原理と方法を提供する理論科学であるという意味において、前者は後者の一分枝であるが、しかし前者とても単に適用の技術論に終始するものではない。原理の適用を通じて事実を発掘し、これを組織し、一般社会学に理論構成の材料を提供する任務をも果す。農村社会学は一般社会学によって武装されなければ、組織化を望むべくもないのと同様に、一般社会学は農村社会学からも資料のいくばくかを仰がなければ、その発展を期待することができない。両者はこのように相強めあう関係に立つ。しかし農村社会学それ自身は、一般社会学を増強するための資料学であるよりは、前者の諸原理を実際に適用して改善案を作成することに本来の使命を見出している。一般社会学との相即的相補的關係にもかかわらず、こ

うした重点の据え方が農村社会学を応用科学たらしめるのである。

著者はついで応用社会学としての農村社会学の主な任務に言及する。  
要旨はつぎの通りである。

農村社会学は専ら農村社会を取り扱う。しかし、それは科学的でなければならない。農村生活問題を論ずるさいに、美辞麗句を連ねあるいは説教に訴えることは、農民および市民一般に農村生活状態の理解を喚起し、妥当な行動を促すためには、なお必要であろう。だが、われわれはすでにさような状態から脱皮した。今述べた覚醒的作業のためにもまず必要なのは、農村社会に関する有効にして妥当な知識を確立する科学的任務である。この任務は、事実の究明、資料の組織および解釈、改善案の作成の3点に要約される。

- (1) 農村社会学は他の科学と同様、その領域内の基本的事実を発見し、検討しなければならぬ。こうした事実を収集するためには、非都市社会に存する諸条件を究明することが必要であるが、事実の究明とは、あらゆる・あるいは多数の・あるいは若干の農村近隣を一々探訪することを意味しない。事実の究明には、農村現象の観察、地域の調査研究、および農村社会に関する既刊文献の収集と研究が含まれる。
- (2) 基本的諸事実を入手したならば、農村社会学は進んで農村社会と  
その諸条件を正確に代表するデータを、一つの知識体系に組織する  
であろう。事実が互いに関係づけられ、その重要性にしたがって一  
団にまとめられる。このような諸資料の整序が解釈の基礎となる。  
科学がもし生活に何らかの意味をもつ限り、対象と条件を因果的に解

釈しなければならぬ。解釈とは事物・過程および条件を評価する作業であり、農村社会学がなしうる最大の貢献の一つは、農村における過程と制度の適不適について意見を陳述することにある。

- (3) 価値を確認することができれば、つぎには自ら「どうしたらよいか」あるいは「どうしなければならぬか」という問題に入ってゆく。なぜなら、大抵のばあい、解釈すること、すなわち生活条件に価値を設定することは、現実と理想を比較して欠陥を発見する作業であるからである。このような改善案の作製はどの応用科学にとっても最後の段階であるように、農村社会学の究極の到達点である。研究者としてこれ以上深入りすることは許されない。改善案の実施は組織家や行政家に委ねられる。したがって、農村社会学者は農村生活の改善に直接たずさわらない。ただ、さような改革の基礎として役立ち、よき出発点であることを希望するばかりである。(1922: 8-10)

以上の叙述は、さきに示された農村社会学の目的と範囲に関する彼の見解を組織的に展開したものに外ならない。事実の究明は資料の組織のためであり、資料の組織はその解釈の予備的操作であり、解釈はやがて改善案の作成に結晶して輝かしい有終の美をなす。だが、改善案の作成はもとより、その準備的操作である解釈にしても、それが評価とよばれる過程を含むかぎり、資料の組織によって直線的に与えられるものではない。科学的に把握された現実には理想の照射を浴びて初めて、適不適の評定に委ねられる。したがって、農村社会学は自らの使命を達成するために、社会建設の理想を掲げるものでなければならぬ。改善策は、理想と現実を架橋するいわば見取図である。では、ジ



レットはどのような理想をいだいたのであるか。われわれは本書によって直接的な告白を聞きえなかったが、思うにそれは、彼にとっては語るに落ちる自明な前提であつたのであろう。

さて、上述のように一般社会学から区別された農村社会学は、他方、農村諸科学とも一線を画するものである。この点について、ジレットはつぎのように論じている。

農村経済学、農村教育、農村宗教、農村娯楽などは、漸く多少とも明瞭な科学の形をとるようになった。これらの諸科学はだいたい同じデータを考察するけれども、各々指導的動機（目的）にしたがつてその範囲と任務をもつから、相互に殆どあるいは全く抵触しない。

農村社会学者は地理的条件を考察することであろうが、取り扱い方は地理学者と同一ではない。農村社会学の目的にとって有用な地理学的事実だけを選択し、それに関連のある地理学者の結論を採用する。そして、農村社会と社会的事情を形成し決定する上にどのような関連があるかを解明しようとする。また、農村社会学者は経済的条件を考察するが、経済学者と同一の操作を行なわない。生産売買および信用それ自身を詳細に研究するのではなく、経済学者の研究成果をとり入れるだけである。けれども、そのような事柄がさまざまな面で農村の福祉にどのように関係するかを確かめ、生活的条件の決定要因としての経済的実情の評価に至ることは、農村社会学本来の任務である。

かように、農村社会学固有の領域は他の諸科学と明瞭に一線を画

するものであり、その限り相互に競合することはない。理想的な農村社会学は、地理的諸条件、経済的要因、学校・教会その他さまざまな重要な要因を評価し総合することであろう。(1922:10-11)

前著において「問題の全面的考察」と表現された見解が、ここでは農村諸科学の研究成果を選択的に採用し、農村福祉の観点からこれを総合すると言い換えられている。全面的考察とは評価を含む選択的総合の謂であり、農村社会学は農村諸科学の何れとも重複せず、むしろこれらと交叉する特殊な位置を与えられている。

以上紹介し来たように、ジレットは農村社会学を理論科学たる一般社会学の応用科学と観じ、一般社会学のアプローチと諸原理を農村事象の理解に適用し、農村諸科学の成果を農村福祉という立場から総合して、社会改良の作業案を作成することを斯学の任務とみたのである。それはまた、彼の農村社会学の内容を決定する。ジレットは本書においてつぎの諸問題を取り扱っている。

#### 第1部 農村社会と農村社会学

農村社会学の定義、農村社会および生活の概説。(全体の序編に当たる)

#### 第2部 農村社会の性格

農村社会の発達、農村社会の顕著な特徴、農村地域社会の諸類型。

#### 第3部 農村人口の諸条件と移動

農村人口の特徴と移動、後進的・反社会的階級、農村の健康と衛生。

#### 第4部 経済的諸条件と諸問題

自然的条件と農業社会、農業生産、国利民福と全国的土地政策、農

(34)

民とその経済的活動（農産物販売と協同）、農場経営、農耕の小作制、農業労働、農村運輸通信、農民とその政治活動。

#### 第5部 農村諸制度

農場婦人と家庭、農村学校と農村教育、農村教会。

#### 第6部 町と田舎

アメリカ田舎町の衰退、町と田舎との関係。

#### 第7部 農村進歩の特殊相

農村進歩、在村農村指導の展開、農村孤絶の緩和、地域社会の建設。

#### (2) ヴォグトらの農村社会学論

ヴォグト (Paul L. Vogt)<sup>(16)</sup> は *Introduction to Rural Sociology* と題するテキストを1917年、すなわちジレットの第1著に遅れること4年にして公刊した。著者が序文において告白しているように、とくに西洋で行なわれている社会福祉のための生活諸条件の制御の努力に、何がしかの貢献をしたいという念願に駆られて執筆された。さればわれわれは、行文の間に、社会科学の有用性にたいする信頼の横溢を感知するばかりでなく、社会科学研究の理由を説明するために割かれた数頁においては、ヴォグトの胸に渦まき、また恐らくは同時代の社会学者達を鼓舞したであろう信念に直ちに接することができる。その意味では、ジレットにおいては抑制されていた彼のいわゆる「指導的動機」の披瀝であり、農村社会学成立期の研究者を動かした根本的動機を知る上にも、きわめて価値の高い文献というべきである。かかる指導的動機の根底をなすものは、ダーウィニンスペンサーの進化論であった。曰く、

生物学者と心理学者によって解明された諸原理が、社会学者の発足点を形成する。彼は人間の構成に固有な若干の本能的傾向を認める。こうした諸傾向は、理論的には、何千年もの生存競争と適者生存の結果なのである。……各人は集団の維持ならびに個体の保持に関心をもつ。この関心を実現しようとして日々活動するうちに、大部分の行為を規則的過程に順応させ、人々との関係をよく整頓された斉一的継続的体系に従わせることの必要性が明らかになる。この体系のとり形式が社会の構造を組み立てる。(1917: 20-21)

ヴォグトは、人間が本能的傾向に即して社会を築きあげたと考える。されば、人間の関心において社会を改良することができるはずである。さような努力に指針を与えるものが科学であるとすれば、農村社会学はこの目的にたいしていかなる貢献をなしうるか。ヴォグトはこの問題に関連して農村社会学の性格を述べる。

農村社会学とは、農村に科学的に能率的な文明を展開しかつ維持する建設的活動の基礎として、農村生活の諸力と諸条件を考究する。この研究の意図は社会的調整の新しい原理を発見することよりも、むしろすでに発見された社会学の諸原理を諸条件の維持と改善に応用するために、諸条件を理解しようとするものである。したがってそれは、何よりも応用社会学の範疇に属する。けれども、社会理論発展の現段階においては、農村生活の研究が人間社会の法則的知識に大きな貢献をすることは、決してありえないことではない。今日の指導的社会学者は、来る2、30年間に農村および田舎町の社会生活の研究が社会理論に最も豊かな若干の寄与をすると見ている。し

かし現在では、実用的応用的見地が現場研究者によって保持されていることを忘れてはならない。(1917: 15)

ヴォグトの所論はジレットの見解と全く平仄を合する。ただ「最良の社会生活の理想」を「科学的に能率的な文明」と表現したところに、いささかの陰影の差を指摘することはできよう。「文明」とは、コント＝スペンサーの社会進化説以来好んで使われた合言葉であるが、初期の農村社会学のテキストに一種の色調を添えるのもこの語句である。もっとも、「科学的に能率的」とはヴォグトの得意とする表現のようである。ジレットの第2著もこの影響を受けたのであろうか、「社会的能率」に言及している(1922: 11)。

しからば、このような学問的性質を与えられた農村社会学の主題は、何であるか。1910年に公開されたアメリカ農場経営協会 American Farm Management Association の初集会の報告に準拠して、ヴォグトは農村問題を技術面、実務面、産業面および社会面の4部門に分ける。つぎのとおりである。

1. 技術面: 「農場の実際」および「農業科学」を含む。自然の法則に関する新しい真理を発見し、それを動植物の生産に応用することもここに入る。
2. 実務面: 「農場管理」すなわち「農場経営」を含む。生産単位ごとに最大の利潤を挙げるように、土地・労働・資本を調整する。
3. 産業面: すなわち「農業経済学」。産業体系の他の要素と農民との関係を問題にする。土地保有、輸送手段、農産物販売、税制、信用制度および保護奨励的法令など。

4. 地域社会面：すなわち「農村社会学」。農民が個性の発達のために最もよく産業的社会的環境を利用する方法，共同の福祉のために最もよく協力する方途，恒久的制度を最もよく維持する方法，農村民の人的社会的資源をよく組織して国民福祉に最大の貢献をいたす方途，などの問題を取り扱う。(1917：16)

農村社会学が農業諸科学とどのような関係をもつかは鮮明を欠くけれども，少なくとも農業技術論，農場財政学，農業経済学といかように対象を分かつかは，上の引用によって窺うことができる。それぞれの部門の説明から推して，(2)実務面は(1)技術面を前提し，(3)産業面は(2)実務面をふまえ，(4)地域社会面は(3)産業面を予想するとすれば，農村問題は1～4の部門に平面的に分類されるのではなく，(1)を底辺とし(4)を頂点とする重層的立体的構図に整理される。このように解するなら，農村社会学の取り扱う地域社会問題は，最も高次でかつ複雑な様相を呈し，これを解決しなければ，いかに技術面が向上し実務面が改善されまた産業面が進歩しても，農村問題の真の解決にはほど遠いことになる。と同時に，農村社会学は，それぞれの部門に対応する科学の成果を必要に応じて摂取するということにもなる。だとすれば，第2著におけるジレットの見解を萌芽的に蔵するものと考えることができる。

このように，ジレットとヴォグトとの基本的一致を指摘することはきわめて容易である。では，ヴォグトはジレットの単なる追従者ないし解説者にすぎなかったであろうか。いな，決してそうではない。ジレットの第2著にはヴォグトの影響に帰すべき2，3の明らかな痕跡

がある。そのうち特筆すべきは、田舎町 village を含めて農村を論じた点である。田舎町を視野の内に納める用意は、自ら農村地域社会 rural community を問う道に通ずる。彼は中央学校と教会の位置を決定するために地域社会の区域を発見する実際的な必要があると述べて、農村地域社会を論じた(1917: 20)。議論そのものは未熟粗雑であるが、のちに農村社会学上の大きな問題の一つとなった rural community 論の先蹤であり、すでに要点に的中している。

本書はつぎの諸章からなる。

1. 農村社会組織(ここで主として農村社会学論が展開される), 2. 農村生活の自然的環境, 3. 農業技術の改善, 4. 運輸通信の手段と農村福祉, 5. 土地問題と農村福祉, 6. 農民の労働収入, 7. 人口移動, 8. 農村健康(身体面), 9. 農村健康(知能面), 10. 農村の社会心, 11. 農村の生命力, 12. 農民の政治運動, 13. 農民の経済組織, 14. 農民の社会組織, 15. 農村生活の要因としての学校, 16. 他の農村教育機関, 17. 教会と田舎生活, 18. 農村教会(改善策), 19. 田舎の共進会, 20. 農村生活との関連における田舎町, 21. 歴史上の田舎町, 22. 田舎町の成長と衰退, 23. 田舎町の社会化, 24. 田舎町における健康と衛生, 25. 田舎町の政治生活, 26. 農村問題の裏面, 27. 農村問題への接近方法, 28. 結論。

サンダーソン(Dwight Sanderson)が1916年のアメリカ社会学会年次大会においてなした「農村社会学の教授」と題する報告中に、その頃の学者による農村社会学の定義がいくつか集録されている。これをこ

こに掲載することは、成立期の斯学の理解のために決して無駄ではな  
かろうと思う (Phelan 1920)。

1. 農村社会学は、より妥当な組織をつくるために農村生活に作用し  
ている社会力と社会要因を研究する。(J. フェラン, マサチューセッ  
ツ農科大学)
2. 農村生活の進化, 組織および改善に関係をもつ制度的および非制  
度的諸力と活動の研究。(L. L. バーナード, ミネソタ大学)
3. 農村社会学は、農村社会制度の進化, 現状および改善の提案に関  
心をもつ。(A. S. ハーディング, サウスダコタ農科大学)
4. 農村社会学は、一般的には応用社会学であり, 特殊的には, 社会  
に関する知識に照らして農村状態を改善する方法を発見し, かつ提  
案するために農村の諸条件を研究する。(N. サイムズ, フロリダ大学)
5. 家庭および近隣関係の改善にたいする提案を意図する農村生活上  
の社会問題の解説。(G. コレー, ユタ大学)
6. 農村社会学は、農場の人々が近隣としてあるいは一つの階級とし  
て生活する生活の仕方に関心を有する。それは農村的環境における  
人間性のリアクションを取り扱わねばならぬ。また、農場に住む人  
人の共同の願望や必要および企画のための協力的努力に関する記述  
をも含んでいなければならぬ。それは一つの全体としての田舎生活  
の改善の問題を含むものであり、農村の人々の共同生活の主要な必  
要および方法をとくに力説する。また、それは満足な農村文明の持  
続およびかような文明に必要な社会機関すなわち制度の問題を含ん  
でいる。(K. L. バターフィールド, マサチューセツ農科大学)



7. 大まかにいって農村生活の社会学とは、田舎に住む人々の団体的あるいは集団的活動の研究であって、こうした活動が農民民の性格にどのような効果をもつかという観点から、これを研究するものである。それは、田舎生活の全機構の中にその究極的な存在として農民自身を認め、農民が人生の最善なるものを自分自身の中に実現することのできる手段方法の考察を含んでいる。(A. R. マン, コルネル大学)
8. 農村社会学とは田舎で共同生活をする人々についての、および人人相互間に働きかける諸力と諸動因についての研究である。(G. H. フォンチュンゲルン, アイオワ州立大学)
9. 農村社会学とは農村地域社会に生活する人間の相互関係に関する科学である。それはまた農村地域社会と都市地域社会との相互関係をも考察するものである。(E. パーンハム, ミシガン州立西部師範学校)
10. 農村社会学は田舎における地域社会生活の諸制度および諸集団に関する研究である。(E. L. ホルトン, カンサス大学)
11. 農村社会学は地方的条件下にある人間性の集団活動および反作用に関する研究である。(E. C. プランソン, ノースカロライナ大学)

定義1—7は、明らかに農村社会学を社会改善のための応用科学と観じている。8—11はそのままでは純学術的研究を志向するようであるが、これにしてもややくわしく定義を述べれば、あるいは1—7と同じことになるのかもしれない。いずれにせよ、成立期の学問的特徴がいよいよ明瞭になったといえよう。

(3) 結語：成立期における農村社会学論の特徴

この期の農村社会学説はつぎのような三つの特徴をもつ。

1. 農村社会学は、一般社会学によって提供された原理と方法を具體的事態に適用する応用社会学である。なぜならつぎの任務をもつからである。
2. 農村社会学は、農村社会を体系的に考究して、その諸力、諸条件あるいは諸傾向を発見し、進歩の原理を組立て科学的に能率的な文明を農村に展開維持するという實際的実利的な建設的任務をもつ。このためにあわせてつぎの努力をも忘れてはならない。
3. 農村社会学は、農村あるいは農業諸科学の成果を選択的に採用し、農村福祉の視点からこれを綜合するものである。

このような特徴によってマークされる学風の、つぎの時代への転換を跡づける前に、成立期の農村社会学が原理と方法の提供を期待した一般社会学にふれておくのも無益ではないだろう。農村社会学の性格は、一般社会学のそれによって基本的に決定されていると考えられるからである。1927年に *Principles of Rural Sociology* を公けにしたランドクィスト (Gustv A. Lundquist) とカーヴァー (Thomas N. Carver) は、農村社会学者の四つの任務の最後に改善の計画を作成することを指摘して、成立期的な傾向を色濃く保持する一方、いかにすれば改善されるかを決定する前に、農村諸条件がいかにして今日あるものになったかを示す必要があることを強調している。彼らは、農村社会学は農村民の社会問題に関心をもち、農村文明の型を決定する諸条件を発見することを目的とし、農村生活を全面的かつ組織的に研究すると明

言して、後期的な色彩をも併せて示している。<sup>(17)</sup>しかし、もし、根強く保持された成立期の特色にこそ注目すべきであるとなしうるならば、ここにおいて彼の社会学を吟味することは、若干の正当性を主張しうると思われる。

カーヴァーの学論は、*Sociology and Social Progress: A Handbook for Students of Sociology* (1905) という彼の編著にかかる書物の序論に明かである。成立期の農村社会学者達の著作を彩った社会進歩の問題が論ぜられることは、題名によって期待することができよう。以下しばらく彼に従って論じてみたい。

これを要するに社会学の学徒は、社会過程ならびに社会現象の因果関係に関する知識を獲得することに、切実な関心をもっている。この知識は、社会改善を企図する知的努力にとって絶対に不可欠であり、社会改善こそは学徒の唯一のとるに足る目標である。社会の黎明や社会制度の起源すらも、その研究価値は主として、それが社会改善の問題に投じうる照射から由来する。だが、歴史的研究よりもより価値の高いのは、現実の社会において作用し、将来の社会を形成しつつあると考えられる社会過程と社会力の分析的研究である。将来の社会を改善するどの企ても、これらの諸力ときわめて調和的に作用しなければならない。

この分析を完遂した唯一の社会の学徒は経済学者であるが、彼らは、社会の発展を形成し、かつ歴史のコースを決定する上に指導的な役割を演ずるのは、経済的要因だというドグマを持っている。社会学は経済学の方法を拡大して、経済学者が無視した社会発展の多

くの要因の研究を含める必要がある。他方、これまで現今の経済的条件の理解のために歴史的知識は須要だと考えられてきたが、それ以上に、現在の経済的社会的条件の知識は、最も基礎的な歴史知識にとって不可欠である。したがって社会学的研究は、われわれの周囲の世界に存在する社会的要因と諸力の研究でなければならない。歴史の研究は、その上で、社会学的研究に新しい照明を投げるのである。

さて、社会学上の研究が過去の歴史の研究にいかほど助けとなるにせよ、将来の改善のために社会政策の作成を可能ならしめる進歩の理論を提出せずしては、正当な存在理由を失うことになる。換言すれば、社会学者の基本的任務は社会進歩の理論を樹立することにある。

だが、「進歩」それ自体を規定することは容易でない。一般的に人間の進歩の観念には、人間福祉の観念が含まれており、常識的には、社会進歩と社会改善とは分かちえない両頭の蛇である。スペンサーは、無生物界・生物界・人間界を一貫する進歩の法則を考えた。彼は、進歩とは同質的なものから異質的なものへ変化することであるとした。同質から異質への変化の背後には、進化論の学徒にとってなじみの深い適応の原理が存する。そして、人間社会における適応は必然的に福祉と結びついているから、進歩を同質から異質への変化とする見方は、進歩の標識としての福祉の考え方を生かしているといえよう。例えば、内的外的諸条件によく適応するような修正をへた社会は、高度の福祉を享有する社会であり、それにたい

して適応が不成功であった社会は、それを享受していない。このように、進歩は適応との関連において規定されるが、しかも同様に、福祉を進歩の標識と考えてよい。もっとも適応は全存在に適用されるのたいし、福祉は感覚生活の分野だけのものである。(1905)

このように社会学は、現実の社会過程と社会力の分析的研究を通じて、社会改善のために社会進歩の理論を提出することを任務とする。農村社会学はこのような一般社会学から、原理と方法の供給を仰いで、提出された社会進歩の理論を実地に施し、農村社会の改善を行なう応用社会学である。<sup>(18)</sup> 成立期における農村社会学の特徴は、一般社会学の趨向と実に密接な内的関連を有することが、かくして明らかであろう。

### 3. 反省期 (1925～1928)

農村社会学が農村社会問題の解決のために孕まれ産み出されてよりここに10年、やがて在来の学問的性質にたいする反省が高まってきた。ライブリー (Lively 1927) もこの間の事情を説明して、「社会学者は農村を興味ある問題集とみ、かような諸問題に一般社会学の原理がうまく適用されると考えた。(しかし今や) 農村社会学の定義についても、“問題の段階”を脱皮した見解がみられる。1917年にサンダーソンが集めた資料と比較するに、農村社会学は(応用社会学ないし社会技術論ではなくて)何よりも社会学の一面であり、対象とする農村社会が他の社会とやや違うという意味で、それ自体特殊な様相を帯び、ためにユニクな研究方法と取扱いを必要とするという方向に、意見が成長してきた」と述べている。

変遷は流れる歳月の必然的な所産でもあろう。しかしこの傾向を決定的に推し進めた政治的事件があった。それは1925年2月19日のパーネル法案上院通過である。反省期の開始時点は、この事件の歴史的意義を記念してひとまず1925年<sup>(19)</sup>に求められる。

#### (1) パーネル法の出現

1919年、大統領ウィルソンは、生産物物価保証協定の廃案による危機を慮って、アメリカ農務省農業経済局に農場人口および農村生活課を置いた。この課の事業はギャルピン (Charles Josiah Galpin, 1864~1947) の指導下になされたのであって、カルプ(Kolb 1928)はこれを農村社会調査発展の道標ともいうべきものであろうとみている。ついで、1920年には、農場問題が専門家以外によっても自覚されかつ取り上げられるように、全国田舎生活協会 National Country Life Association が設立され、この協会から1923年以降 *Rural America* 誌が刊行されたことも、パーネル法登場の前奏曲として忘れられてはならない (Kaysenbrecht 1932)。

さて、米国の第1次大戦参加後、農業および農村生活の経済的社会的問題にたいする関心が著しく高まり、農科大学および農業試験場の職員はかかる方面の研究に必要な資金の増額を求めるに至った。このために開かれた数度の会合の後、ミズリー農科大学長マムフォード (F.B. Mumford) が法案を起草した。これがインディアナ農業試験場長クリスティー (G.I. Christie) に送られ、インディアナ州選出下院議員パーネル (F.S. Purnell) の同意を得て議会に提出されることになっ

た。かくて1921年1月、同年4月、1923年12月の三度この法案が提出されたが、結局時宜をえないものとしてその都度成立が見送られた。しかし、1926年6月末で終る会計年度には20,000ドル、爾後4年間10,000ドルずつ増額して、最高額60,000ドルをその後年々補助するということに修正され、1925年2月19日遂にパーネル法案の上院通過をみたのである。この法律は補助金の使途を規定して、農産物の生産・製造・調整・使用・配給・販売に直接関係する研究および実験、恒久的能率的な農業を確立維持することを目的とする科学的研究、農家および農村生活の発展と改善とを目的とする経済学的社会学的研究に必要な費用を支払うべきものとした。それは、農業研究援助の義務を州から解除するものではなく、この方面にたいする州の努力を一層刺激すべきものと考えられた。また、とくに農業経済学・農村社会学および家政学の新分野において、試験場と農務省各局、および試験場相互間の協同関係の拡大を期待するものであった。1925年11月農科大学連盟の会合において、同連盟の農業試験場部と実行委員会が農務省にたいして発表した声明の中で、「パーネル法は堅実な研究という語の意味する近代的概念と現代の知識水準とに基づいて、確固たる研究を推進するように工夫されている」と賞讃している (True 1937)。

かくして、1930年以後、従来交付されていた種々の補助金と合して、各州農業試験場は毎年約9万ドルずつ支給されるはずであるから、農村社会学的研究の飛躍的な成長は、テイラーならずとも刮目して待つべきものであったろう (Taylor 1927)。事実、研究は日に日にその数を加えた。しかし、それとともに、「農村社会学とは何か」という基本

的問題が研究者の間で真剣に論ぜられねばならなくなったのである (Sanderson 1927)。ロスがホーソンに与えた序文の中で、芽を出したばかりの農村社会学は、農村の人口、健康と衛生、家庭、学校・教会、娯楽、組織と指導に関する研究のコレクションであったと評し (Ross 1926)、チムマーマンもとくにジレットの農村社会学——それはすでにみた通り、成立期の古典的範型を示すものであった——を指して、農村改良のために農村社会における生活諸条件をもれなく数えあげようとする、社会生活の完全な科学であると解説した (Zimmerman 1928)。コレクションあるいは問題集は、いかほど網羅的に数え挙げていても、果して学問の名に値するものであろうか。しかも、このような作業ならば、先駆者達の揚言にもかかわらず、必ずしも農村社会学者のお家芸ではない。一体、農村社会学的研究というのは、何だろうか。のみならず、パネル法によってこの方面の研究の数が俄かに増大するとともに、もともと社会学的訓練が不充分だった農村社会学者の群のなかに、社会学の素養もない人が加わってきたために、事態はいよいよ救うべからざるものとなったのである (Taylor 1927)。ここにおいて、成立期の斯学の性格が根本的に批判され、古き皮衣を脱皮する努力が払われるのも、けだし当然の推移であろう。

## (2) ホーソンの農村社会学論

従来の農村社会学の在り方にたいする反省は、多くの面から提出された。しかし、まず指を屈すべきは、*The Sociology of Rural Life* (1926) に組織的に展開されたホーソン (Horace Boies Hawthorne) の



学論であらう。

彼はまず、農村社会学はまだ形成期にあるのに、開拓者達はこの若い科学から直ちに結果を期待する人々の批判に晒されていると述べて、容易ならぬ生みの悩みを悩みつつあることを示唆したのち、農業経済学者・農村衛生学者・農村教育家などが、農村社会学固有の領域に立ちいつてきた——バーネル法以後農業試験場などにおける農村研究の隆盛を意味するものであらう——ので、社会学者は農村生活を見なおす必要が生じたとし、今や農村社会学をその古い淀泊地から断ち切って、新しい時代の流れに棹さす努力がなされればならぬ、この本はこうした新しい分野と方向をまとめたものであると、本書の野心的意図をほのめかしている。そして、これまで農村社会学の研究者は事実をきわめてよく知っていたが、資料を解釈し組織する哲学をもたなかった。もちろん、多くのとりうべき接近方法と哲学がある。だが、本書を貫く見解は唯一つ、農村社会の社会化分析 *socialization analysis* であるという。社会化という観点から農村社会を統一的にみようとする意図において、ホーソーンはきわめて野心的といわなければならない。

ホーソーンは第1章においてこの基本的概念をくわしく展開するために、まずこれまでの農村社会学にたいする反省から出発してはぼつぎのように論じている。

農村福祉に情熱を有する人々は、頽廃しつつある農村社会を再建したいという博愛的願望に動かされて、よい田舎生活に関連のあるあらゆる科学と技術を動員した。かくて多くの場合、農村社会学は、  
優生学・倫理学・道路経済学・農場経営学・家政学・教育学および

宗教学からの進出により、分野を拡大していった。したがってこの学問は、純粹社会学を農村社会に厳密に応用することから派生したのではなく、一種の総合的産物として展開した。農村社会学はこの方法によって、より明瞭に農村発達の姿を国民に示しえたことは、むしろ初期の農村社会学の名誉でもある。もしこの若い学問が純粹に社会学的な方法によって歩みを進めたならば、恐らくは今日もつ威信を獲得しえなかったことと思われる。なぜなら、社会学はまだきわめて幼稚だったからである。けれども、過去において農村社会学が目的の単一性を欠いたことは、まぎれもない事実であり、今日、諸科学が明瞭に自己の分野を画しつつあることにかんがみて、農村社会学も社会化的な社会学的研究に自己を限定するようになるう。

(1926:6)

では、社会化という問題がなぜ視野の中心に立たなければならないのであろうか。ホーソーンはまず、農村社会学は農村社会における不順応を除去しうる手段をつきとめ、よりよい文明を建設する工夫を展開するものであるという大前提をかかげる。そして、文明とは単に物質的なものにつぎののではなく、とくに社会学は田舎生活の人間的側面を重視するとして、人間の本来の位座を万物の中心に回復し、何よりも人的資源の開発と保存を図るべきことを強調する。この論理をおし進めてゆけば、農村生活の成功度を測る真の尺度は精神的心理的収入でなければならぬ。彼はつぎのようにいう。

生計をたてること to make a living と生きること to live とは別のことである。豊かであろうと貧しかろうと、人生のなかから取得  
(50)

しうるものはみな生活の資であり、眞の収入たるこの生活の資とは、金銭・住宅・農場の大小の問題ではない。それよりももっとつかみ難い精神的なものである。それは書物にふれ、自然を眺め、人々・集団などにふれて心にいただく心理的収入である。……もし見るべき目をもたず、聞くべき耳をもたないならば、いかに外面的に豊かであるにせよ、内面的には極貧といわざるをえない。(1926:5)

農村社会学は、かかる精神的能力の開発を通じて、人的資源を活用し、アメリカの沃土の上によりよい農村文明を築きあげることができると。しかれば、精神的能力の開発はいかにして可能であろうか。ここでホーソーンは農村民の社会的栄養に論及し、やせこけた足や顔にたいして科学的に均衡のとれた栄養が考慮されるように、萎縮したパーソナリティに供与すべき、バランスのとれた社会的接触という食事について論ずべき日が来るであろうと述べる。つまり、窮極的な収入は精神的なものであり、これを獲得する能力は社会的接触を通して養われるのである。社会化は社会的接触に相即する。かくして、社会化こそは農村問題研究の統合的視点でなければならない。したがって、農村社会学者は、例えば、家庭における農村生活条件、作業日の長さ、生活の物理的標準、小作制度の問題、田舎の教会と学校、あるいは農村娯楽の考察を無視するものではないが、教育家として、衛生家として、あるいは農村経済学者としてとりあげるのではなく、社会学者としてこれらを問題にし、社会化過程の諸要因として研究するのである。

ホーソーンは、「社会化という手引に従えば、農村社会動学は田舎生活に関する一定の見地と解釈を展開することだろう」と前おきして、

つぎのように述べる。そこには、社会化の哲学よりする演繹的な農村理解と展望が与えられることであろう。

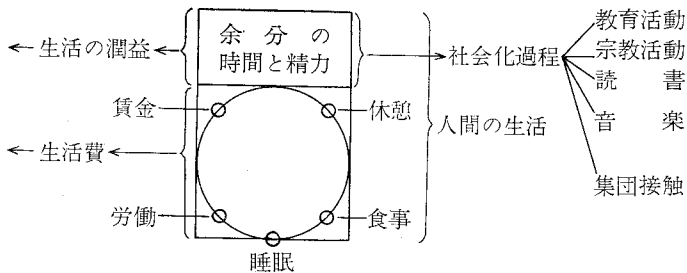
- 1) 農村民は彼らのパーソナリティを社会化し、精神的幸福を獲得するよう、たえず努力している。書籍・新聞・ラジオ・教会およびクラブを通して、内的なものを培ってゆく刺戟をえようとし、歌・討論・ページェント・ピクニックを通じて、閉じこめられた自我を表現しようとする。……社会学は多彩な人間俳優によって演出されるこの驚くべき社会化のドラマを分析し組織し、指導できなければならない。社会学は、田舎生活を早魃・南京虫などの戦いということより、もっと深い関連において解釈しなければならないのである。
- 2) 地域社会 community は、社会的接触を生産し、分配する社会化のメカニズムである。それは、農場屋敷と商店の点在する経済的生産の場であるのみならず、文化の歴史をもつ複合的な社会関係の有機的総体である。単に、耕作・収穫・市場・売却・金融の舞台ではなく、技倆が市場に出され、社会的接触をとおして青年がパーソナリティを発展させ、人の運命が決定される場でもある。そこには、生計 livelihood を獲得すると同様に、生活 life を展開する好機会がなければならない。(1926:7-8)

ここにおいて、農村社会化の科学的研究としての農村社会学の任務が、積極的にうち出される。

工業の面において、あたかも経済的需要の増加がより高度に組織された機械の発明を要求するように、関心と文化的要求の拡大によって、より専門化され調整のとれた社会的機構の実現が必要とされ

る。社会的効用の生産と分配に関する経済を研究するという点で、また、より能率のよいメカニズムを考察するという点で、社会学は農村の進歩に大きな貢献をする。もし農村経済学が農場の物的生産物の生産・評価・分配・消費に関する科学であるならば、農村社会学は農村社会の社会的効用の生産・評価・分配および消費の科学となる。(1926:8)

このように見てくると、多くの農村問題の解決は社会化のいかにかかることになる。彼はその点について、まず、経済的繁栄だけではよりよい生活は保証されない。なぜ経済的繁栄を追求するかという、それによって文化的社会的な生活水準を高める基礎が高まるからであると述べて、つぎのような社会化と経済循環の図を示している。(1926:13)



機械化の進捗に伴って、時間と精力の余剰が作り出され、社会制度と文化的サービスにたいする要求が高まった。人は図書館・教会・学校・家庭・クラブ・記念行事・書物など社会化の働き手としての諸制度に接触して、社会化された個人となる。よく社会化された人

の心理的収入は、そうでない人のそれより大きいから、たとえ現金収入は少なくとも、全収入はかえって多くなろう。しかも農民がますます社会化されることは、一層能率のよい農業体系を建設するための基本的な条件であり、その意味で多くの農村問題の解決は社会化にかかるといわざるをえないのである。

このような彼の根本的観念の背後に、つぎのような観念が横たわることを否定しえないであろう。

土地収奪的小作制度が生活水準を低め、農夫の質を低下させることは考えることである。しかしそれよりも、社会的でない水呑根性の農夫こそ、不在地主、貧弱な学校、衰退した教会、人口資源の枯渇および低い生活程度など、小作制度に帰せられる多くの禍害を導き入れ易いというべきである。……そして水呑根性はほかならぬ社会的飢餓の結果なのである。(1926: 10, 34)

今や原因結果そのところを変えた。ロスが序言においてみじくも要約したように、著者は水呑根性 *peasant-mindedness* は小作制度や小規模農業から発生したものではなく、知的孤立と沈滞の所産であることを示そうとする。しかし、このような見方は決して彼の独創に帰せられるべきものではなく、むしろ成立期の農村社会学者の共有財ですらあった。しかしこの見解は、先駆者たちがかつて牧師であったために観念的な精神論を好んだことに由来するのでは必ずしもなく、むしろ、これこそ19世紀末から20世紀初頭へかけての米国農村問題の核心をつく解答だったのである。ホーソー (Hawthorne 1926: 7) 自身も言及しているように、農村生活問題をいろいろな角度から考察したの

ち、社会化を中心問題としたのは、ジレットその人であった。ジレット (Gillette 1922: 23-24) は、農民離村という現象は農村生活の不満足さ、社会的飢餓を如実に物語るものであって、農業過程と田舎生活の社会化こそが農村生活の最も主要な問題であるとした。また、ギャルピン (Galpin 1918: 57) のとき、農村社会問題解決のスローガンは「一にも二にも、より多くの人との接触」“Human contacts, more human contacts, and still more human contacts” であるといっている。もし、農村の社会化が広義に解釈されて、教養と高い生活水準を備えた田舎文明がうちたてられる過程であると理解されるならば、農村社会学者は社会化を農村生活問題の焦点とすることに完全な意見の一致をみていることは、ホーソー (1926: 7) が断言する通りである。

チムマーマン (Zimmerman 1928: 251) がこの書物を評して、ホーソーは一見したところ、農村社会学は社会科学の全内容を要約すべきであるという成立期特有の理論を放棄したかに見える。彼は「社会化」という新しい概念を導入して、これをテキストの中心テーマとした。しかし彼の問題の取り扱い方はユニークではない。彼も他の人と大体似たりよつたりの仕方、農民の性格とパーソナリティおよび彼らの社会との関連において、人間行動と環境の全分野の効果を、一步一步分析したにすぎない、と述べた文字を想起すべきであろう。もちろん、チムマーマンも容認したように、接触の時間をあらゆる分野の行動が個人に与える影響を計測するために使用されうる単一の単位と考えて展開した点で、ホーソーのテキストは他に類例がないにせよ、

「新しい研究の分野と方向」をもつと自己紹介した本にしては、あま

りにも古い時代の流れに漂うものではあるまいか。しかしながら、農村問題に関する単なるコレクションを脱して、組織的な体系を示そうとする最初のまとまった企画であったことは、たとえ組織化の眼目が実証されない一個の哲学であるにせよ、また、社会化の主張にみられる経済的要因の貶価は不当であるにせよ、そのために決して軽視されてはならないのである。すでに鈴木栄太郎 (1933 : 83) も注意したように、ホーソーンの農村社会学は、「いわば過渡期の産物」として反省期の曙を飾るものであろう。

### (3) テイラーの農村社会学論

つぎにホーソーンのテキストと同年に出た、テイラー (Carl C. Taylor)<sup>(20)</sup> の *Rural Sociology: A Study of Rural Problems* を吟味することにして。まず、彼の学論を要約すればつぎのとおりである。

- 1) 農村社会学と一般社会学との相違：一般社会学は、あらゆる人間関係の構造と機能を分析し記述しなければならない。これにたいして農村社会学は、農業という職業によってあるいは直接に農業に依存する職業によって生活する人間集団の記述と分析を任とする。農村社会学は農民相互の関係、農民と国民および世界の他の部分との関係、農村制度、農村の生活水準、農場の生活と労働、および農場社会に関する社会問題を取り扱う。この広い内容の下に、あらゆる社会学は、農村社会学と都市社会学とに分たれるであろう。

(1926 : 3)

- 2) 農村社会学と農村経済学との相違：区別は上ほど容易でない。農
- (56)



村経済学はとくに農業の富・信用・生産費・収入・経営および市場要因を取り扱い、農村社会学は社会組織あるいは社会福祉を条件づけるものとしてのみ、こうした諸要因を取り扱う。(1926:4)

- 3) 農村社会学が、他の農村社会科学の分野をもおおわねばならぬ理由：まだ明瞭な科学にまで発展していないものもあるが、分析を完全にするための分業として、農村経済、農村倫理、農村宗教、農村教育、農村社会心理学などがある。これらの分野に重要な社会問題があるけれども、テキストもコースもないので、(便宜上)農村社会学はこれらにわたって記述し分析する。(1926:4)

これによってみれば、テイラーには成立期的な特徴の鮮やかな褪色が認められる。もはや農村社会学は応用社会学ではなく、特殊の研究分野をもつ社会学の1領域である。また、改善案の作製を自己の任務の圏外に駆逐し、他の農村社会科学とも一定の視点に立って交叉するのみである。それ以上は便宜的な包括とされ、農村社会科学の総合学では決してない。ただ「農村社会学は農村問題を起こす諸条件を分析し、これを構成する諸力・諸条件を分析しようとする」(1926:11)ものであり、本書の副題にすでに明らかなように、テイラーの農村社会学は、純学術的研究に自己を限定するにしても、なおかつその対象は農村問題により多く傾いている。その点において過渡期の1様相を顕著に示している。序文を書いたチェピン (F. Stuart Chapin) が、「本書の取り扱い方は、批判的学究的な記述と分析を害することなく、全く共感的である」と評したのも、むべなりというべきであろう。かような傾向は、さきにその要点を紹介したランドクィストらの書物(1927)

からも、同様に看取することができるのである。

テイラーは翌年、『アメリカ社会学雑誌』(AJS)に、「農村社会学における調査」と題する論文を寄せた。ここで、従来の農村社会学的研究の不備とその理由を、おおむねつぎのように述べている。

科学とは単に、知識の分類あるいは現象の記述および説明として規定されるのが常だったが、さような不十分な定義を使用する場合にのみ、農村社会学的調査の存在が容認される。しかし、それはまだ科学の水準にまで高まったものといえない。従来の農村社会調査の基礎はあまりにも狭く、科学的一般化に耐えうるほどの、体系的で忍耐強い分析はまだ現れていない。なぜなら問題を組織的に考えせず、個々の要素を別々に取り上げるのでは、そのような研究結果は比較しえないからである。

農村社会調査が不十分だった主な理由は二つある。

- 1) 実用的研究に資金が与えられたので、結果をすぐ出さねばならぬような条件下で研究が行なわれた。
- 2) 農村社会学者はよく訓練されていなかった。これまで、農村社会学者は個人的興味に従って研究し、系統的技術が構築されないうちに、つぎからつぎへと新しい問題へ移った。パーネル法以後、社会学の素養のない人まで研究に加わったので、一層事態が悪化した。

(Taylor 1927)

- 最後に研究のプログラムを要約して、1. 新しい事実を発見し、  
二 2. 既知の諸事実の因果関係を決定し、3. 諸原理の体系を展開し、4.  
九 方法論を展開すること、であるとした。これによってみれば、1926年

のテキストにみられる研究態度に比して、いわゆる「問題の段階」を  
超克したかに見えるが、あるいは盾の両面というべきかもしれない。  
ともあれ、1927年は、農村社会学の方法論に関する論究が一つの頂点  
に達して、反省期の仕あげがなしとげられた年であった。われわれは  
つぎに、この年の分析に目を転じなければならない。

#### (4) 1927年に現れた諸論考

『アメリカ社会学雑誌』第33巻第2号(1927年9月)は、サンダー  
ソン、メルヴィン、テイラー、カークパトリック、ライプリーらの論文  
を一挙に掲載した農村社会学特集ともいうべき号であった。また、こ  
の年の12月にワシントン、D. C. において開催されたアメリカ社会学  
会第22回年次大会において、農村部会はギャルピン、カルプ、マムフ  
ォード、ジー、ホッファー、チムマーマン、ヨルダー、ライプリーら  
の報告をえた。殆どすべての第一線農村社会学者が論陣をはって検討  
を重ねた1927年こそは、農村社会学の内部から鬱然と起こりつつあっ  
た反省と批判の声を整理して、往くべき方向を明瞭に指し示し、パー  
ネル法出現以来の大きな転換を確定的にした記憶さるべき年であった。  
われわれはまず、サンダーソン (Sanderson 1927) の所説から顧みるこ  
ととしよう。彼はつぎのように論じている。

ジレットを代表者とする農村社会学に関する一般的見解は、社会  
学の特殊の主題である現象、および社会福祉にたいして社会学がな  
しうるユニークな貢献をうまく規定していない。社会福祉は、何が  
なさるべきであるかという判断、一定の行為規範を前提にしている

から、それは社会倫理との関連において理解されねばならぬ。しかも、社会福祉のために社会学の知識が応用されるばかりでなく、経済学・政治学・生物学・地理学等の成果も利用しなければならぬから、社会福祉は何も必ずしも社会学のお家芸ではない。従来の農村社会学関係の書物は社会福祉を取り扱った論考であり、それはそれとして価値の高いものであるが、福祉問題を研究する科学的方法としては殆ど助けにならないのである。このように、社会学を社会福祉問題の研究とみなすことが支持し難いのなら、科学としての社会学の分野は何か。故スモール教授がうまく弁護したように、社会学は単なる総合の方法であるのか。

農村社会学，すなわち農村生活の社会学は、そのユニークな研究対象として、さまざまなタイプの社会集団の解剖学と生理学に関心を懐いている。これは生物学との類比によるもので、前者は社会学であり、後者は社会心理学である。こうした科学的なデータが社会組織化に適用される。ここで初めて社会学は社会福祉と関連をもつ。したがって、ふつう「社会学」とよばれる研究に、(1)本来の社会学、(2)社会心理学、(3)社会組織化（あるいは社会経済学）という応用科学、の3分野があり、前二者は純粋科学である。従来の一般社会学のテキストはこの3者の混成であって、集団が分析されても集団行動の研究は進まないという、専門化を欠いた状態だった。したがって科学的方法も原理もあまり展開せず、このように全く不十分なデータから、応用科学の発達を企図したところに困難があった。それ故、農村社会学の研究においては、人間結合形態の科学としての社会学

と、集団行動の科学としての社会心理学とを区別しなければならないと考える。

1) 社会心理学：つぎの三つを含む。

ア．個人の他の諸個人にたいする社会的反応の心理学。

イ．集団の行動型における諸個人の相互作用（彼は好んでこれを集団生理学とよぶ）。

ウ．集団行動，集団それ自体の行動あるいは集団の環境にたいする反応（集合心理学）。

2) 社会学：特殊の主題としてつぎの四つが挙げられる。

ア．集団の構造——近隣とか，農村地域社会などの解剖学，特殊の行動型の知識を含む。

イ．集団の分類，すなわち分類学——地域集団，血縁集団，関心集団，その他。目的によって分類の基準が異なる。

ウ．集団の機能——地域社会内の教会と学校，教会とグレンジ，グレンジと学校との間の典型的な関係は何か，また田舎町と農場の関係は，など。

エ．社会変動——学校の機能の拡大と家族，交通の発達 of 地域社会に及ぼす影響など。

このように，研究の対象は豊富であるが，方法論の欠陥が最も大きな悩みである。

3) 社会組織化：社会学および社会心理学という純科学的研究も，所詮社会組織化のためであり，社会組織化はこれらの知識と原理を現実事態へ応用するという意味で応用科学である。社会福祉の

問題は、まず農村社会学の範囲で事実をつきとめ、つぎに他科学の資料を援用して社会的に何が望ましいかを決定し、最後にいかにして社会変動の動向を制御するかを、社会心理学その他のデータを使って決定する。だから、社会組織化は社会学の一分肢ということとはできない。しかし、この問題を他の社会科学が取り扱わないし、社会学は社会集団の研究にたずさわる限り、社会組織化と親縁を有するといってよい。社会組織化は手続きの上で科学的であり、研究の副産物は諸科学に貢献するものがあるけれども、倫理的要因をもちこむので純粋な科学ではない。由来、科学は何が可能であるかを示すに止まり、いかにあるべきかを示さない。これを指示するのは、ひとり倫理的判断のみである。

サンダーソンはこの論文において、成立期の農村社会学がもつ曖昧さを払拭し、単に、学術的研究としての社会学および社会心理学の成長を鼓舞したばかりでなく、長い伝統をもつ社会組織化の努力にたいしてその位置を明瞭に規定することに成功した。原理とその応用という平面においてではなく、科学と実践という次元において問題を整理したところに、問題把握の的確さが窺われるのである。テイラーにおいてはまだ社会学の中に含まれていた農村社会心理学が、本来の社会学から区別されたのも注目すべき点である。恐らくは、農村社会心理学に関する最初の書物といわれるウィリアムズ (J.M. Williams) の *Our Rural Heritage* (1925), *The Expansion of Rural Life* (1926) の出現によって、農村社会学とは別に農村社会心理学を掲げうる自信を確かめたのではあるまいか。サンダーソンは最後に、「農村社会組織化の研究

を行なうためには、応用科学の基礎である社会学および社会心理学を樹立することが急務であり、また他の科学の業績を援用することを忘れてはならない」と述べ、「今日、最も大きな問題は妥当な方法論に関するものである」と結んでいる。

つぎに、メルヴィン (Melvin 1927) が方法論について反省的に論説している。学論の部分だけを抽出すればつぎのとおりである。

農村社会学は、農村社会のあらゆる社会現象にわたってこれを研究することはできない。心理学・経済学・政治学などがそれぞれに違った角度から問題を取り上げているから、農村社会学は農村社会における諸種の集団の形態と機能の抽象的分析にその任務を限定しなければならぬ。これまでの農村社会学関係のテキストや刊行物をみるに、農村社会問題、農村生活の社会心理学、地域社会組織化、そして本来（と彼が考える）の農村社会学を含んでいるが、農村社会問題のごときは他の社会科学よりもまず農村社会学が担当しなければならぬものではない。農村社会学者の科学者としての第1の義務は、農村社会における集団関係に関する重要な事実と原理を発見することであり、結果の応用は社会事業家・説教師・教師などに委ねるべきである。

以上に要約したメルヴィンの立場は、サンダーソンほど明快ではないが、論旨は同一とみなしてよい。メルヴィンは必要な科学的方法として、1. 処理のための3段の操作—観察による事実やデータの蒐集、事実の分類、事実間の関係あるいは関係の欠如の発見—、2. 研究分野と問題の限定、3. 客観性の確保、4. 純科学的研究への志向、の4項をあげて、農村社会学的研究が科学的であるための基本的要件を解

説する。ついで調査方法の動向として、

- 1) 資料蒐集のために六つの異なった技術——質問票・現地調査・事例記録・文書・面接・日記——が使用されていること、分類と帰納のために、地図・図表・グラフ・統計・相関表が用いられていること、
  - 2) このほか研究の途上で新しい方法と技術がつくり出されていること、
  - 3) 計測の単位と正確な表現の単位が工夫されていること——カークパトリックの社会的価値、ホーソーンの社会的接触等、
  - 4) 研究の諸要素を正確に規定する試み——近隣と地域社会など、
  - 5) 地域社会組織化および農村社会問題の両分野で実験法が使用されていること、
  - 6) リンドマンが唱えた参加観察者の観念、
- について展望している。それは現状の整理であって、現状批判ではない。ホッファーとチムマーマンがメルヴィンの論文にたいする討論者として立ち現れているが、大要は兩人ともこれを承認し支持している。

つぎにカークパトリック (Kirkpatrick 1927) が、農村社会学者と経済学者との共同調査の必要を強調し、とくに家族生活水準の問題は共同研究によって豊かな収穫を挙げることのできる分野だと述べる。最後にライブリー (Lively 1927) が農村社会学教育の反省について報告した。彼は教育状況を回顧したのち、農村社会学は何よりも社会学である。田舎に住む人間集団の科学研究に自己を限定することによって、人間関係を理解しようとするもので、純粋と応用の両面をもつ。しかるに社会学の教師は、一方では社会学の原理と無関係に農村社会問題



を教えるものがあるかと思うと、他方では、農村生活それ自体と直接の接触なしに農村生活の社会学を教授するものがあることを指摘し、教育の三つの狙いと、二つの様式について述べている。

ここで一応の締めくくりをつけて、この時期の傾向を打ち出すことは困難ではないが、同年12月のアメリカ社会学の年次大会における農村部会の報告を一つつするまで、暫く留保することとしたい。

この部会でのギャルピンの挨拶によれば、Social Science Research Council に問題と政策に関する委員会が1925年に組織され、翌年10の小委員会が指名されたが、そのうちの農業の社会的経済的調査に関する小委員会は、農業経済学と農村社会学の両分野にわたり、合衆国で遂行されつつある多方面の調査企画を批判的かつ建設的に展望することとした。1926年には、カルプが合衆国で現に進行中のあらゆる農村社会学的調査研究に関して報告し、1927年にはギャルピンがサンダーソン、テイラーおよびカルプの援助をうけて、この方面のより集中的でかつより広汎な展望を試みたという。1927年に農村社会学の回顧と展望、あるいは反省と批判に関する論文が出そろった感のあるのは、決して偶然ではなかったのである。次第に熟してきた反省の気運がパネル法による研究の盛行を通じて昂揚され、さらにこの委員会のまことに時宜をえた企画により決定的に現実のものとなった。

さてギャルピンらの展望をカルプが要約して部会に報告した。まず州および研究所が実施している調査企画とその主題については、機関の性格別および主題別に調査企画の数をあげ、ついでどのような調査方法がよく使用されているかを論じ、調査要員の概観に及んでいる。

方法については、殆どすべての報告された研究が直接観察よりは面接における証言、つまり第2次的データによっていることを指摘し、自然科学で甚だ有効であった直接観察と実験を行なう準備をしなければならぬと述べ、調査要員に関しては、調査者の科学精神と科学的訓練が最も必要であると結んでいる (Kolb 1928)。

カルプの報告を承けて、マムフォード (Mumford 1928) が農村社会学的研究のつぎのステップと題する講演をし、第1に、研究を意識的にかつとくに社会学的にすべきこと、純粹に社会学的な面が一層強調される必要があること——例えば農村組織化の面では多くの価値ある研究がなされてきた一方、人口研究が86中16にも達するが、それは真の社会学的研究の道具以上の何ものでもない。第2に、これまでの研究は成人に関するものであったが、最も初期の児童の集団生活から始まって、学齡前・学齡初期・少年期・青年期および職業期を含めて、農村社会化の全段階が周到に研究されるようなプランを作成すること、このためには、第一次集団というカテゴリーを活用すること、最後に、農村社会学の研究を農村経済学の研究と密接に相関させること、を力説している。

つぎにジー (Gee 1928) が研究のつぎの段階について述べ、ホッファー (Hoffer 1928) は各種大学における農村社会学の地位について報告した。ホッファーは、コースが社会学の名を掲げるときは、社会福祉よりも科学的側面が常に強調される必要があること、この区別は教科よりも調査のさいにより大切であること、正常な関係が理解されたときにこそ病理的異常現象が研究されるのであるから、正常的現象を社

会問題に関するものよりもさきに取り上げる必要があることを説いた。

ついでチムマーマン (Zimmerman 1928) が農村社会学教科書の分析結果を報告した。ジレット、ギャルピン、サイムズ、ヴォグト、フェラン、テイラー、ホーソーン、ランドクィストとカーヴァーのテキストを順次組上にあげて論評したのち、改革は科学と混同されてはならぬ。社会科学は人間行動に関する知識と諸原理の体系化であるのになし、改革は倫理的評価の問題である。農村社会学のユニークな目標として改革を要求する科学的根拠は何もない。合衆国の農村社会学を展開させた3人の先人は、暫く牧師であり、彼らの弟子も多く牧師であったから、改革精神が鼓舞され、若干の説教がなされていることは決して不思議ではない。しかし、農村社会学者は、説教と改革の時代を速かに通過しなければならぬ。今日、この分野のあまりにも多くの人々は、95%が倫理的熱狂者で5%が科学者である。さような人の貢献がきびしくチェックされなければ、この科学の発展は阻まれるであろう。社会学は結局モノグラフ的科学として立つことが本筋なのである、と述べた。つぎに、若干の主要な理論の妥当性を吟味し、農村生活は悲劇であり、また常にその傾向があるというテイラーの説、孤立と社会化の説、農場の優秀で活動的な分子が都市に去ったという説、農民の家計費の特徴に関する説、農村児童の身体的条件は都市児童のそれよりもずっとよくないという説、都市の死亡率は農村のそれと同じか、あるいはそれを下廻るまで下るだろうという説を批判して、根拠がない、証明されていないなどの理由で、これらすべてを斥けた。けだし、不十分にしか論証されていない理論は、科学の健全な進歩を

誤るからである。

このチムマーマンの報告にたいしてヨーダーとライブリーが意見を附加している。そのうち、ヨーダー (Yoder 1928) の討論を紹介しておく。農村社会学のテキストは学生の立場を念頭において書かれているので、社会学のテキストのうち、最もよい教科書に属する。現在のテキストの短所は、(1)農村社会生活の心理学および文化的側面、(2)地方的一般的歴史的発展、(3)農村生活にたいする都市の有機的關係、(4)農村社会生活にたいする機械および機械時代の関係、の取り扱いが弱い点であろう。テキストの内容が科学的に正確でないものが多いことは、チムマーマンの説く通りであるが、それは農村社会学がまだ幼稚で、科学的データが欠如しているからである。読者に明瞭な見地を与えるかどうかでテキストの良否が分かれるのであるが、この点については、農村社会学者の間に今日なお、農村社会学的現実は何であるかに関して混乱と不一致がみられる。また、さまざまな中心的概念を整理する必要がある。農村社会学は純粋な理論的科学であるべきか、あるいははっきりと実用的な応用学であるべきかについても、チムマーマンに同調できない。純粋科学としての農村社会学と、応用科学としての農村社会学との間に何ら必然的な衝突はない。むしろ相補的なものである。学者が一般化に到達したさいにこれを建設的な農村社会組織化の基礎とすることは何ら差支えなく、また実験とデータ吟味の唯一の手段は地域社会組織化である、と述べた。ヨーダーとチムマーマンのいづれが、明日の農村社会学の方向をよく指示しえたかは、ことさらに論ずるまでもないと思われる。

われわれは順を追って諸家の見解を要約したのであるが、農村社会学の性格、農村社会学的研究、農村社会学の教授、およびテキストの各分野にわたる組織的検討によって、批判の帰一点を見定めることはもはや困難ではない。上記四つの事項はその根基を農村社会学の性格にもち、これによって基本的に決定されるものである。したがってわれわれは、反省期の陶冶を経て鑄出された農村社会学の性格を要約して、本章を閉じることとしたい。

- 1) 農村社会学は純科学的研究に限定さるべきであり、倫理・価値判断を含む農村社会問題ないし社会組織化という実践的分野から訣別しなければならぬ。
- 2) さような本来の農村社会学とは、農村地域における人間結合の構造と機能および変化の分析を任とし、社会心理学的研究とは一応別個の領域をもつ。
- 3) このような内容を与えられた農村社会学は、農村社会組織化の基礎として利用されなければならない。そのさいに農村社会諸科学の成果が併せ採用されるべきことはいうまでもない。

これを成立期の特徴と比較すれば、反省期の意義が自ら明らかとなるであろう。

注

- (1) スミスも、*rural sociology* より *the sociology of rural life* という標題のほうがより論理的である、という (Smith 1947: 10)。しかし、この理解はドイツの農村社会学には妥当しない。例えばヴィーゼはつぎのように解説している「合衆国では本来田舎生活の単位はムラ *Dorf* でなくて農

場であるから、Dorfsoziologie が問題にならず、rural sociology つまり Soziologie des Landeslebens が問題になっている。ドイツでは何よりもムラが田舎の社会化の単位であるから、われわれは rural sociology を翻訳して Soziologie des Dorfes とするのである。」(Wiese 1928: 3)

- (2) 同じ事情は都市社会学においても見ることができる。例えば、アンダーソンらはいう。「urban sociology という呼称は誤った命名である。なぜなら、都市現象の科学はありうるが、都市的科学はありえぬからである。本来は the sociology of urban communities というべきところを、これでは冗長に失するので、それに代って語の簡潔を旨として使用されているにすぎない」と。(Anderson and Lindeman 1928: viii)
- (3) グレイによれば、「研究と教授の1分野としての農村社会学は、年こそ若い、その年齢を超える成熟に達し、思春期すなわち子供から成人への過渡期にあるということができよう。政府機関と私的団体の後援により実施される大々的調査計画、専門的関心の広汎な拡がり、農村社会学会の組織と機能などから、斯学が成熟に近づいていることを察することができる。他方、実施されつつある多くの研究間の調整の欠如、公立諸大学の農村社会学講座で使用されている資料・方法・重点がまちまちであるところに、未成熟さが認められる。」(Gray 1947: 264)
- (4) ギャルピンも、アメリカ合衆国で農村社会学を初めて講じたのはヘンダーソンだったと思うと、回想している (Galpin 1936: 3)。また、第2期の曉鐘を高らかにうち鳴らしたジレットは、1900年にヘンダーソンが行なった講義 Rural Communities によって、農村事情にたいする彼の関心が喚起されたと、述懐している (Gillette 1913: Preface)。
- (5) ウィルソン (Warren H. Wilson) はギディングス (Franklin H. Giddings, 1855~1931) のもとで社会学を学び、教会を田舎生活組織化のための制度体とみなして、(Wilson 1907, 1912) など、最も初期の農村社会研究を公けにした。これに刺激されて多くの農村教会の研究が現れた。彼の主な経歴は、合衆国プレスビテリアン教会の国内伝道部農村主事。
- (6) なお、アメリカ農場生活の変化については、ブリット (Britt 1960) をみよ。
- (7) ルーミスとビーグルは、農村社会学がアメリカで発達した理由の一つ
- (70)

に、農村に広汎にみられる定住の型が孤立屋敷であって、それが農民の団体行動を困難にしたことを挙げている。もしアメリカの農民が集落に住み、そこから農場に出かけることになれば、多くの農村問題は解決されるだろうと考える人もあるという (Loomis and Beegle 1950: 165)。歴史的事情に加えて、その事情を深刻な問題にした生態学的条件を考慮にいれることは、有益であろう。

- (8) 実証的な農村社会研究に画期的な一石を投じたギャルピンは、農耕の人間の側面にふれて、「大統領ルーズベルトが農民に生産の社会的配当金の分け前をもっとやらねばならぬと叫んで国民の覚醒を促した1908年以来、農耕の人間の側面は誰からも注目され、農場の男女と子供によりよい生活を、というのが田舎生活のスローガンになった」(Galpin 1948: 156)と回想している。彼自身、最も重要なものは農業における人間の要素であることを一貫して主張し、農耕生活の物的側面を強調しすぎる傾向を是正する上で貴重な働きをした、といわれる (Garnett 1948: 172)。このような論説をもう1、2点追加しておく、「社会学は物質的価値よりも人間的価値に関心をもつ」とし、「富の蓄積ではなく、パーソナリティの拡充と洗練が社会学者の意図するところである」としたマン (Mann 1917)、農業経済学のテキストの終りのほうで「農場生活の社会的側面」なる1章を設け、H. プランケット卿の言葉を引用して、農耕や農産物販売の改善は暮らしの改善にならなければならぬと論じた H. テイラー (Taylor 1921) が、さし当たり目につく。
- (9) 農村地域社会および農村教会・農村学校にかんする先駆的研究が、1910年前後、ギディングスの弟子たちにより相ついで学位論文の形にまとめられた (Williams 1906, Wilson 1907, Sims 1912)。彼らの動機は、「社会の科学」の発達のために現地に臨んで帰納的研究をすることであって、農村社会問題を問題意識のなかに把握するに至っていなかった。農業試験場のスタッフが農村研究の戦列に加わったときには、まだ研究はあまり進捗していなかったとテイラーは評しているが (Taylor 1945, 1949)、これらの先駆的研究こそ農村社会学をうち出した「知的活動」の一翼であったことは、疑う余地がない。ジレットその人も、ギディングスのグループに追隨する1人だったのである。

(10) ただ、つぎの点は注意する必要がある。すなわち、フンボルトやスペンサーが提唱し、サムナー (William G. Sumner, 1840~1910) が推進させた自由放任の原理、つまり、社会的進化は有機的進化と同様に自動的かつ自発的過程であって、有意的統制に服しないから、最も賢明な手続きは「自分のことだけ心配せよ」ということだとの主張が、ウォード (Lester F. Ward) によって克服され、集団主義が個人主義と交替しなければ社会事業は出現しえなかった、ということである。(Steiner 1930)

(11) 1902年バターフィールドが講師としてミシガン大学で農村社会学の講義を担当したことをさす。彼はさらに1904年ロードアイランド農科大学で国有地無償払下げ大学 landgrant colleges では最初の農村社会学のコースをもった。しかし、すでに述べたように、これを去る10年前にヘンダーソンがシカゴ大学で農村社会学を講じている (Lively 1927: 231)。アンケート調査によると、アメリカの諸大学における農村社会学の講義開設状況は下記のとおり (Sanderson 1917: 181-208)。

1894~5 シカゴ大学 (ヘンダーソン)

1902~ ミシガン大学 (バターフィールド)

1904~5 ロードアイランド農科大学およびコルネル大学

1906~7 ミズリー大学およびマサチューセッツ農科大学

1908~9 サウスダコタ大学

(12) ランドクィストとカーヴァーはつぎのように述べている。「これ (森岡注一田舎生活委員会の報告) は農村問題史上、記念碑的事件であった。何か新しい問題とか新しい解決法を発見したからではなく、すでにその存在が知られている諸問題にたいして公衆の注目を喚起し、学者と政治家が注意するに足る問題であることを公けに示したからである」と。さらに続けていう。「農場生産物の市場売買の問題が切実な問題の一つであることが分かった。この問題が注目された結果、第1に、国会の農場ブロックと結んで真正な農業運動を構成するさまざまな農場組織の活動が刺激され、第2に、米国農務省のなかに市場局の設置をみた。この局はのちに農場経済局に発展した。……」 (Lundquist and Carver 1927: 10)

この委員会がいかに大きな影響を与えたかは、ロスが農村社会学は1908年頃地表を破って芽をふいたといい (Ross 1926: Preface)、カルプが米国



- における農村社会学的研究は1910年頃から始まると述べた (Kolb 1928) ことによっても、窺い知られよう。
- (13) ジレットの伝記は、Reinhardt 1949, 1950a, 1950b; Odum 1951 a をみよ。
- (14) ジレットは、社会学は有用でなければならぬ、と信じていたという。(Reinhardt 1950b: 251)
- (15) 学論の記述に充てられた第1章は、脚注によれば、1916年アメリカ社会学会の年次大会で報告され、同学会の刊行物第11巻に掲載された論文に基づいている。この大会は「農村生活の社会学」という主題のもとに、ほとんどすべての報告が農村社会学者によってなされた記念すべき年会であった。(Coen 1930: 181)
- (16) ヴォグトはオハイオ州立大学農村経済学・農村社会学の元教授で、メソジスト監督派教会国内伝道普及局農村課主査をつとめた。
- (17) カーヴァーらの農村社会学論は、ジレット、ギャルビン、サイムズ、フェラン、テイラー、ホーソーンらの説と基本的様相を共有するが、このテキストには改革者の信条が削除されている点で目新しい、と評される。(Zimmerman 1928)
- (18) ジレットの第1著に親しく序文を寄せたヴィンセントが、その師スモールを佐けて著作したアメリカ最初の社会学テキスト (1894) において、「現在の社会学の最大の任務は社会に関する既存の知識を関連づけることであり、未開拓の社会現象の発見およびより有効な社会的努力のプランの作成を含む」とし、「社会学は特殊科学の成果を総合するものである」と述べたことを、ここにあらためて想起すべきであろう。農村社会学はアメリカの総合社会学が産み落した血統正しい嫡子であった。
- ライプリーは、スモールとヴィンセントのテキストを評論して、哲学・想定および未証明の理論が多すぎることを指摘したのち、「こうした先行者から農村社会学が起ってきたので、同様の困難がみられる」と述べている。(Lively 1928)
- (19) 鈴木栄太郎は、米国農村社会学の発達を2期に分けて、第1期を実際問題考究の時代、第2期を研究方法考究の時代とし、この分界を1925~6年頃に引いている (1933: 26)。喜多野清一もこれに賛意を表した (1936)

ことに注意せよ。

- (20) テイラーは1884年アイオワ州の農村に生まれ、20歳頃まで高校へもゆかず、農場で父の仕事を手伝ったが、父のもとに来る知識人（とくに牧師）に接して、もっと世の中を広く知りたいと思い、牧師になるための勉強をしに出かけた。だが、やがて牧師よりももっと世の中を理解できる活動分野のあることが分かり、ミズリー大学の大学院では社会学のコースを選び、バーナード (L.L. Bernard) の指導を受けた。そして、農場出身であることが、農村社会学を選ばせることになったのである。ノースカロライナ州立大学農村社会学教授、1936年から連邦政府農務省農業経済局農場人口・農村福祉課長をつとめた。(Odum 1951b)

#### 引用文献

- Anderson, Nels, and Lindeman, Eduard C., 1928, *Urban Sociology: An Introduction to the Study of Urban Communities*. Alfred A. Knopf.
- Britt, Albert, 1960, Revolution on the farm, *The Yale Review*. (アルバート・ブリット, 本間重俊訳「農場における革命」『アメリカーナ』1961年9月号, 33-43.)
- Carver, Thomas Nixon, 1905, ed., *Sociology and Social Progress: A Handbook for Students of Sociology*. Ginn.
- Coen, B.F., 1930, Introduction to the Section of Rural Sociology, *PASS*, 24(2), 180-188.
- Comte, Auguste, 1822, *Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*.
- Galpin, Charles J., 1918, *Rural Life*. The Century.
- Galpin, Charles J., 1936, Greetings from Charles Josiah Galpin, *RS*, 1 (1), 3.
- Galpin, Charles J., 1937, The story of my drift into rural sociology, *RS*, 2 (3), 299-309.
- Galpin, Charles J., 1948, The human side of farming, *RS*, 13(2), 156-164.
- Garnett, W.E., 1948, Selected letters to Galpin, *RS*, 13(2), 172.
- Gee, Wilson, 1928, The next steps in research, *PASS*, 22, 241-243.

- Gee, Wilson, 1929, Rural sociology as a field of research in the agricultural experiment stations, *AJS*, 34(5), 832-846.
- Gillette, John M., 1913, 1919, *Constructive Rural Sociology*. Sturgis and Walton.
- Gillette, John M., 1916, *Sociology*. (Chicago)
- Gillette, John M., 1922, 1928, 1936, *Rural Sociology*. Mcmillan.
- Gray, Wayne T., 1947, Materials for a standardized basic course in rural sociology, *RS*, 12(3), 264-273.
- Hawthorne, Horace B., 1926, *The Sociology of Rural Life*. Appleton-Century.
- Hoffer, Charles R., 1926, The development of rural sociology, *AJS*, 32 (1), 95-103.
- Hoffer, Charles R., 1928, The status of rural sociology in colleges and universities, *PASS*, 22, 244-249.
- Hoffer, Charles R., 1930, *Introduction to Rural Sociology*. Farrar and Rinehart.
- Kaysenbrecht, Richard, 1932, Rural sociology in the United States, *Sociological Review*, 24 (1), 37-46.
- Kirkpatrick, E.L., 1927, Joint co-operative studies on the economics and sociology of rural life, *AJS*, 33 (2), 222-230.
- 喜多野清一, 1936「米国に於ける農村社会学の発達」『年報社会学』(日本社会学会) 4 (岩波書店), 110-140.
- Kolb, J.H., 1928, Scope, methodology, and personnel in rural social research, *PASS*, 22, 232-235.
- Kolb, J.H., and Brunner, Edmund de S., 1935, 1940, 1946, *A Study of Rural Society*. Houghton Mifflin.
- Landis, Paul H., 1938, The development of rural sociology in the United States, *SSR*, 22(4), 329-335.
- Lively, C. E., 1927, Report of the Committee on the Teaching of Rural Sociology, *AJS*, 33 (2), 231-236.
- Lively, C.E., 1928, Discussion of C.C. Zimmerman's report on a partial

- analysis of textbooks in rural sociology, *PASS*, 22, 258-259.
- Loomis, Charles P., and Beegle, J. Allen, 1950, *Rural Social Systems: A Textbook in Rural Sociology and Anthropology*. Prentice-Hall.
- Lundquist, Gustav A., and Carver, Thomas N., 1927, *Principles of Rural Sociology*. Ginn.
- Mann, A.R., 1917, The sociology of rural life, *The Cornell Country*, 14 (6), 459-646.
- Melvin, Bruce L., 1927, Methods of social research, *AJS*, 33 (2), 194-210.
- Mumford, Eben, 1928, The next steps in rural sociological research, *PASS*, 22, 236-240.
- Nelson, Lowry, 1948, *Rural Sociology*, American Book.
- Odum, Howard W., 1951a, John M. Gillette: 1866-1949, in Odum, *American Sociology*, Longmans, Green, 144-147.
- Odum, Howard W., 1951b, Carl C. Taylor: 1884~ , in Odum, *American Sociology*, Longmans, Green, 222-226.
- Phelan, J., 1920, *Readings in Rural Sociology*. (New York)
- Reinhardt, James M., 1949, John M. Gillette dies, *RS*, 14 (4), 381.
- Reinhardt, James M., 1950a, In memoriam: John Morris Gillette, 1866-1949, *AJS*, 55 (4), 404-405.
- Reinhardt, James M., 1950b, The Sociology of John M. Gillette, *SSR*, 34 (4), 243-251.
- Ross, Edward A., 1920, *Principles of Sociology*. (New York)
- Ross, Edward A., 1926, Preface, in Hawthorne, H. B., *The Sociology of Rural Life*. Appleton-Century.
- Sanderson, Dwight, 1917, The teaching of rural sociology: Particularly in the landgrant colleges and universities, *PASS*, 11, 181-208.
- Sanderson, Dwight, 1927, Scientific research in rural sociology, *AJS*, 33(2), 177-193.
- Sanderson, Dwight, 1942, *Rural Sociology and Rural Social Organization*. John Wiley.
- 新明正道, 1951 『社会学史』 有斐閣.

- Sims, Newell L., 1912, *A Hoosier Village*. Longmans, Green.
- Sims, Newell L. 1928, 1934, 1940, *Elements of Rural Sociology*. Thomas Y. Crowell.
- Small, Albion W., and Vincent, George E., 1894, *An Introduction to the Study of Society*. American Book.
- Smith, T. Lynn, 1940, 1947, *The Sociology of Rural Life*. Harper.
- Sorokin, Pitirim A., and Zimmerman, Carle C., 1929, *Principles of Rural-Urban Sociology*. Henry Holt.
- Sorokin, Pitirim A., Zimmerman, Carle C., and Galpin, Charles J., 1930-32, *A Systematic Source Book in Rural Sociology*, 3 vols. University of Minnesota Press.
- Steiner, Jesse F., 1930, *Community Organization*. Century.
- 鈴木栄太郎, 1933『農村社会学史』刀江書院.
- 鈴木栄太郎, 1940『日本農村社会学原理』日本評論社.
- Taylor, Carl C., 1926, 1933, *Rural Sociology: A Study of Rural Problems*. Harper.
- Taylor, Carl C., 1927, Research in rural sociology, *AJS*, 33 (2), 211-221.
- Taylor, Carl C., 1945, Techniques of community study and analysis as applied to modern civilized societies, in Linton, Ralph, ed., *Science of Man*, 416-441.
- Taylor, Carl C., 1949, Rural life and rural sociology, Chap. 1 in Taylor, C.C., and others, *Rural Life in the United States*. Alfred A. Knopf.
- Taylor, Carl C., and others, 1949, *Rural Life in the United States*. Alfred A. Knopf.
- Taylor, Henry C., 1921, *Agricultural Economics*.
- True, A.C., 1937, A History of Agricultural Experimentation and Research in the United States, 1907-1925.(吉武昌男訳, 農業綜合研究所)
- Vogt, Paul L., 1917, 1922, *Introduction to Rural Sociology*. D. Appleton-Century.
- Wiese, Leopold von, 1928, *Das Dorf als soziales Gebilde*.
- Williams, James M., 1906, *American Town*. R.W. Williams.

Wilson, Warren H., 1907, *Quaker Hill*. W.H. Wilson.

Wilson, Warren H., 1912, *The Evolution of the Country Community*. The Pilgrim Press.

Yoder, Fred R., 1928, Discussion of C. C. Zimmerman's report on 'A partial analysis of textbooks in rural sociology, *PASS*, 22, 256-257.

Zimmerman, Carle C., 1928, A partial analysis of textbooks in rural sociology, *PASS*, 22, 250-255.

Zimmerman, Carle C., 1946, *Outlines of American Rural Sociology*.

#### Abbreviations

*AJS: American Journal of Sociology*

*PASS: Publications of the American Sociological Society*

*RS: Rural Sociology*

*SSR: Sociology and Social Research*

## あ　と　が　き

本稿は、1952年に筆者が東京文理科大学において行なった社会学特殊講義の講義案をもとにとりまとめたものである。33年も前の旧稿を篋底から取り出して白日の下に晒すことは随分と躊躇されたが、この紀要をしかるべき厚さのものにするという大義名分のもとに恥を忍ぶこととした。ただ、この方面の研究は予想外に進んでおらず、鈴木栄太郎『農村社会学史』（1933）および喜多野清一による若干の論考（1936ほか）を除くなら、筆者の下記2点に指を屈しうるていどである。かくて、旧稿も埃を払えばあるいはまだ若干の価値を主張しうるかもしれないという、身勝手な希望的観測が後ろめたい思いを和らげてくれるのである。なお、1910年代から30年頃にかけての実証研究の展開を迹づけた小稿「アメリカ農村社会学におけるルール・コミュニティ論の展開」（村落社会研究会編『村落共同体の構造分析』時潮社、1956、180-203）、および第2次大戦後の発達を概観した小稿「戦後のアメリカ農村社会学」（村落社会研究会編『村落研究の成果と課題』時潮社、1954、223-233）を参照していただけるならば、本稿の今日的価値はまだいくらか増加するのではないかと思われる。（1985. 1. 31）